宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報

(Ⅵ)

1986

宮崎県教育委員会

正　誤　表

ページ	行	誤	正
5	1	Ⅲ、遺跡の概要	Ⅲ、調査の概要
20	4～5	切断形	切断した形
21	1	遺跡群ほぼ全域	遺跡群のほぼ全域
30	21	添って	沿って
39	3	天目Ⅲ	天目茶碗

「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅵ）」

宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報

(Ⅵ)

1986

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では、地域振興整備公団の委託を受けて、昭和55年度から宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

本書は、昭和61年度に調査いたしました陣ノ内遺跡と車坂城跡の概要報告であります。

陣ノ内遺跡における平安時代のカマドを持つ住居跡群の調査では、種々のカマドが検出され、カマドの変遷を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。また、車坂城については、「日向記」などの文献からしか推察できなかった事実を考古学的に明らかにする糸口を見いだすことができました。

なお、これらの貴重な調査の成果が学術関係者だけでなく社会教育や学校教育の分野にも広く活用されると共に、文化財保護行政推進のための一役となることを期待します。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を賜った地域振興整備公団や調査指導の先生方に対して衷心から御礼を申し上げます。

昭和62年３月

宮崎県教育委員会

教育長　船木　哲

例　　言

1．本書は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて、県教育委員会が実施した宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡群の昭和61年度の発掘調査概要報告書である。

2．各遺跡の調査期間、調査担当者は次の通りである。

陣ノ内遺跡（18号地）　昭和61年４月14日～10月31日
調査担当者　永友良典・菅付和樹

車坂城跡　昭和61年９月１日～11月20日
調査担当者　永友良典・菅付和樹

3．本書の執筆、及び編集には永友と菅付が当った。また、文責については文末に明記している。

4．本年度の特別調査員として、中世山城について村出修三奈良女子大学助教授にお願いした。記して深甚の謝意を表します。

5．本書では、次の通りの略記号を用いている。

ＳＡ……竪穴住居跡、ＳＣ……土壙、ＳＥ……溝状遺構

本　文　目　次

陣ノ内遺跡

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 3
Ⅱ　調査の経緯と経過 …… 3
Ⅲ　調査の概要 …… 5
Ⅳ　まとめ …… 20

車坂城跡

Ⅰ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 23
Ⅱ　調査の概要 …… 27
Ⅲ　まとめ …… 39

挿　図　目　次

第 1図　陣ノ内遺跡遺構配置図…… 1～2
第 2図　学園都市遺跡群位置図…… 4
第 3図　ＳＡ４遺構実測図 …… 6
第 4図　ＳＡ４出土遺物実測図 …… 7
第 5図　ＳＡ18遺構実測図 …… 8
第 6図　ＳＡ18出土遺物実測図 …… 9
第 7図　ＳＡ18出土遺物実測図・拓影 …… 10
第 8図　ＳＡ19遺構実測図 …… 11
第 9図　ＳＡ19出土遺物実測図 …… 12

第10図　ＳＡ９遺構実測図 …… 13
第11図　ＳＡ９出土遺物実測図(1)…… 13
第12図　ＳＡ９出土遺物実測図(2)…… 14
第13図　ＳＡ20遺構実測図 …… 15
第14図　ＳＡ20出土遺物実測図・拓影 …… 16
第15図　ＳＡ３遺構実測図 …… 17
第16図　ＳＡ３出土遺物実測図・拓影 …… 17
第17図　ＳＡ７遺構実測図 …… 18
第18図　ＳＡ７出土遺物実測図・拓影 …… 18
第19図　ＳＣ４遺構実測図 …… 19
第20図　ＳＣ４出土遺物実測図・拓影 …… 19
第21図　車坂城跡周辺遺跡位置図 …… 24
第22図　車坂城跡現況概念図 …… 28
第23図　曲輪遺構配置図 …… 31～32
第24図　曲輪土塁土層断面図 …… 33
第25図　曲輪空堀土層断面図 …… 34
第26図　曲輪遺構実測図 …… 35
第27図　車坂城跡出土遺物実測図・拓影 …… 36
第28図　帯曲輪空堀土層断面図 …… 38

図　版　目　次

図版１　陣ノ内遺跡遠景（南・車坂城跡上より）・遺構分布状況・東区（東から）
図版２　遺構分布状況・中央（北から）・遺構分布状況・西区（南から）
図版３　ＳＡ４検出状況・ＳＡ９検出状況
図版４　ＳＡ18検出状況・ＳＡ19検出状況
図版５　ＳＡ20検出状況・ＳＡ３検出状況

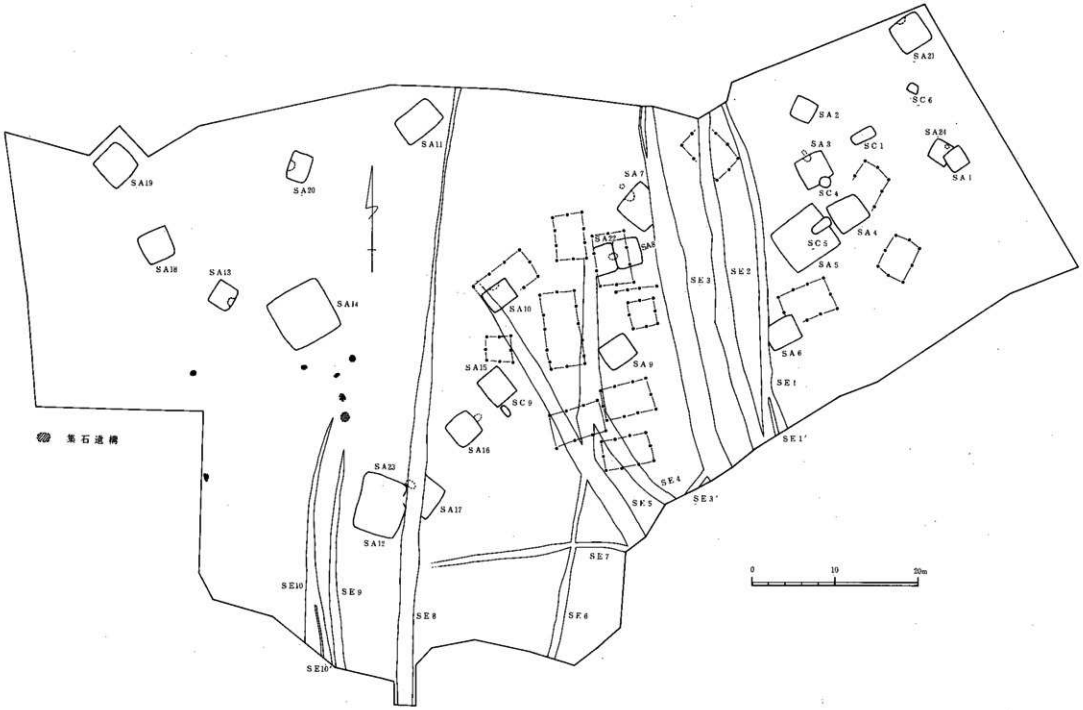
図版６　ＳＡ７検出状況・ＳＡ13カマド検出状況
図版７　ＳＣ４検出状況・ＳＣ４古銭出土状況
図版８　ＳＥ５検出状況・集石遺構検出状況
図版９　ＳＡ４・ＳＡ18出土遺物
図版10　ＳＡ19・ＳＡ９出土遺物
図版11　ＳＡ20出土遺物
図版12　ＳＡ３・ＳＡ７・ＳＣ４出土遺物
図版13　車坂城跡遠景（南から）・車坂城跡遠景（北・陣ノ内遺跡より）
図版14　帯曲輪検出状況（北側）・帯曲輪検出状況（北東端）
図版15　帯曲輪空堀検出状況・帯曲輪空堀東側検出状況
図版16　曲輪検出状況（東側）・曲輪検出状況（西側）
図版17　No.９遺構検出状況・No.35遺構検出状況
図版18　No.11遺構検出状況・No.23遺構検出状況
図版19　車坂城跡出土遺物

表　目　次

表１　ＳＡ４土器観察表 …… 7
表２　ＳＡ18土器観察表 …… 11
表３　ＳＡ19土器観察表 …… 12
表４　ＳＡ９土器観察表 …… 14
表５　ＳＡ20土器観察表 …… 16
表６　ＳＡ３土器観察表 …… 17
表７　ＳＡ７土器観察表 …… 18
表８　ＳＣ４土器観察表 …… 19
表９　車坂城跡出土遺物観察表 …… 37

JIN UCHI

陣ノ内遺跡



第1図　陣ノ内遺跡遺構配置図（1／400）

Ⅰ、遺跡の位置と環境

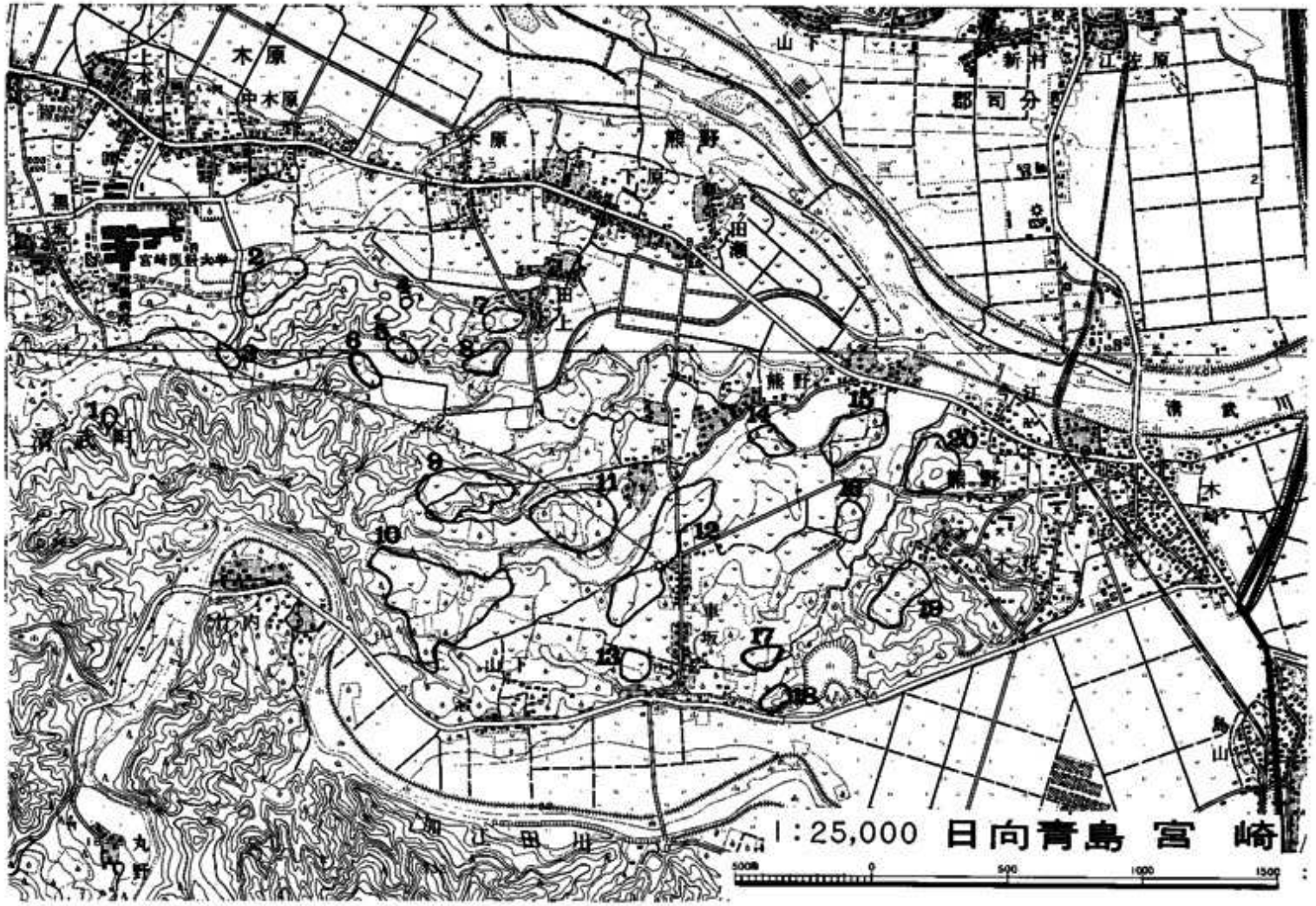
陣ノ内遺跡は宮崎市熊野から清武町木原にまたがる宮崎学園都市遺跡群内の南東部に位置し、宮崎市大字熊野字陣ノ内9288他に所在する。遺跡は東西約300m、南北約70mと東へ細長く突き出した舌状台地上に立地する。標高は12～13mとほぼ平坦地になっており、周辺は西側を除いて全て湿地帯が広がる。台地突端の東側はすでにアカホヤ層まで削平されている。また、西側の台地付け根付近も大幅な土取りが行われており、今回調査区の東西両側とも遺跡の広がりは不明である。調査区についても、昔から畑地として利用されていたため、耕作土を剝いだ状態では、アカホヤ層面まで削平されており、特に、中央部から西側にかけてはアカホヤ層はもちろん、その下の層まで削平を受けており、旧地形は若干の起伏があったと思われる。

遺跡の南には湿地帯をへだてて車坂城跡があり、今江城跡へ続く丘陵が東から北へ延びる。また、遺跡の北側には、縄文早期の集石遺構と弥生時代中期～古墳時代前期にかけての集落跡を検出した前原北遺跡や、古墳時代前期と平安時代の集落跡を検出した前原南遺跡、西側には弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡を検出した熊野原遺跡など陣ノ内遺跡と関連する遺跡が周辺に分布する。

Ⅱ、調査の経緯と経過

陣ノ内遺跡は地形から約20,000㎡が遺跡としての可能性が考えられるが、1981年度に実施した試掘調査の結果、台地の東側、西側とも削平や土取りが行われており包含層の確認はできなかった。包含層が検出された部分は中央部約6,500㎡で、土師器片や焼石等が出土し、2枚の文化層が確認できた。

発掘調査は昭和61年4月13日から実施した。まず、重機を使って耕作土を除去した後、遺構検出を行った。しかし、二次堆積、あるいは風化したアカホヤの堆積がみられたうえ、自然層と区別のつきにくい埋土のため確認が困難で、検出に時間を費やした。その結果、アカホヤ層面で竪穴住居跡、土壙、柱穴、溝等を検出できた。また、調査区の西側では、アカホヤ層が削平を受けており、何ヵ所かに焼石の集まりが確認できた。アカホヤ層面の調査が終了した10月上旬から、引き続きアカホヤ層を重機で除去し、アカホヤ層下の褐色土層の調査を行ったところ、西側を中心に集石遺構を検出した。調査は10月31日をもって終了した。



第2図　学園都市遺跡群位置図

Ⅲ、遺跡の概要

調査の結果、遺構、遺物の検出はアカホヤ層上下にみられた。

アカホヤ層下層からは縄文時代早期の集石遺構13基と早期の押型文土器を検出した。また、アカホヤ層上層からは竪穴住居跡24軒を中心に溝状遺構、土壙、掘立柱建物跡などが検出された。時期的にみると、弥生時代中期の竪穴住居跡１軒と弥生土器、古墳時代前期の竪穴住居跡８軒と土師器、古代では平安期のカマド付竪穴住居跡10軒を含む15軒の竪穴住居跡と土師器、布痕土器、内黒土器など、また、古代～中世にかけての溝状遺構10数条、掘立柱建物跡10数棟や土壙と土師器、陶磁器、土錘、中世の土壙墓１基と土師皿、古銭などがある。

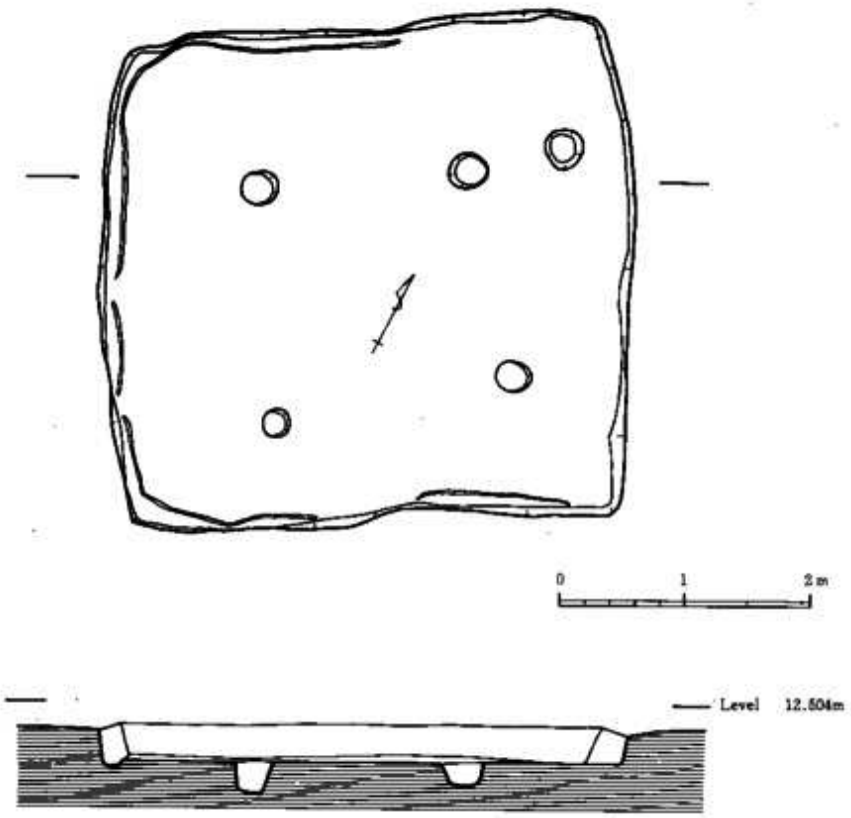
1. 山内石塔群（23号地）
2. 下田畑遺跡（１号地）
3. 赤坂遺跡（７号地）
4. 小山尻西石塔群（８号地）
5. 浦田遺跡（４号地）
6. 入料遺跡（５号地）
7. 小山尻東遺跡（２号地）
8. 田上遺跡（３号地）
9. 堂地西遺跡（９号地）
10. 平畑遺跡（10号地）
11. 堂地東遺跡（11号地）
12. 熊野原遺跡（14号地）
13. 犬馬場遺跡（13号地）
14. 前原西遺跡（15・16号地）
15. 前原北遺跡（20号地）
16. 前原南遺跡（19号地）
17. **陣ノ内遺跡（18号地）**
18. **車坂城跡**
19. 木花遺跡（21号地）
20. 今江城（仮称）跡

縄文時代

陣ノ内遺跡の層序はアカホヤ層より上については削平のため不明であるが、耕作土（0）一風化、あるいは二次堆積のアカホヤ層（Ⅰ）一アカホヤ層（Ⅱ）一暗褐色土層（Ⅲ）一褐色土層（Ⅳ）と続く。縄文時代の文化層はⅢ層下位～Ⅳ層にかけてみられる。集石遺構は西側を中心に13基が分布する。直径約1mの掘り込み内に拳大の焼石が密な状態で構成されている。散石はほとんどの集石遺構が上面まで削平を受けているためあまり認められない。遺物は山形押型文を共伴している。

弥生時代

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡1軒が検出された。調査区の東側に位置し、4m×4.2mのほぼ方形を呈している。やはり削平を受けており壁面の残りは僅かである。柱穴は4本と思われる。遺物は少ないが、鋤先口縁に円形浮文を施した壺や倒L字状口縁に最大径を持

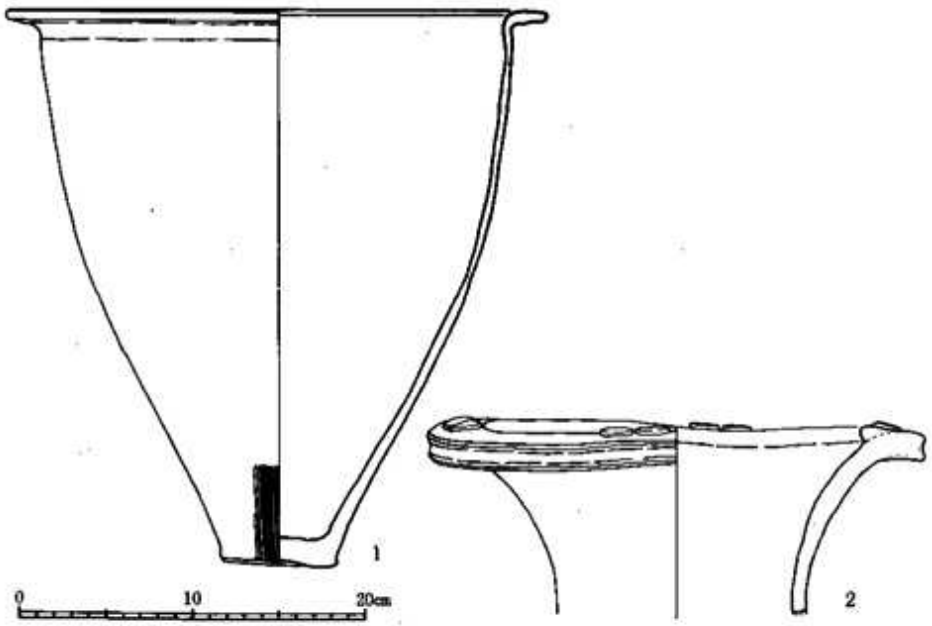


第3図　SA4遺構実測図（縮尺1／60）

つ甕など特徴的なものがみられる。また、弥生土器を出土する土壙（ＳＣ６など）もみられる。

古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡8軒を数える。プランは方形で、規模は、ＳＡ９が３ｍ×４ｍ、ＳＡ18が４ｍ×４ｍと床面積も12～16㎡のものが大半を占めるが、ＳＡ５は６ｍ×７ｍと床面積40㎡を超える大型の住居跡である。柱穴は２本柱（ＳＡ９、ＳＡ18など）のものが多く見られる。また、検出された柱穴の状況から２本柱と４本柱との組み合せが考えられるもの(ＳＡ19)や、円形状に柱穴が並ぶ形をとるもの（ＳＡ５）などがみられるが、立て替えや



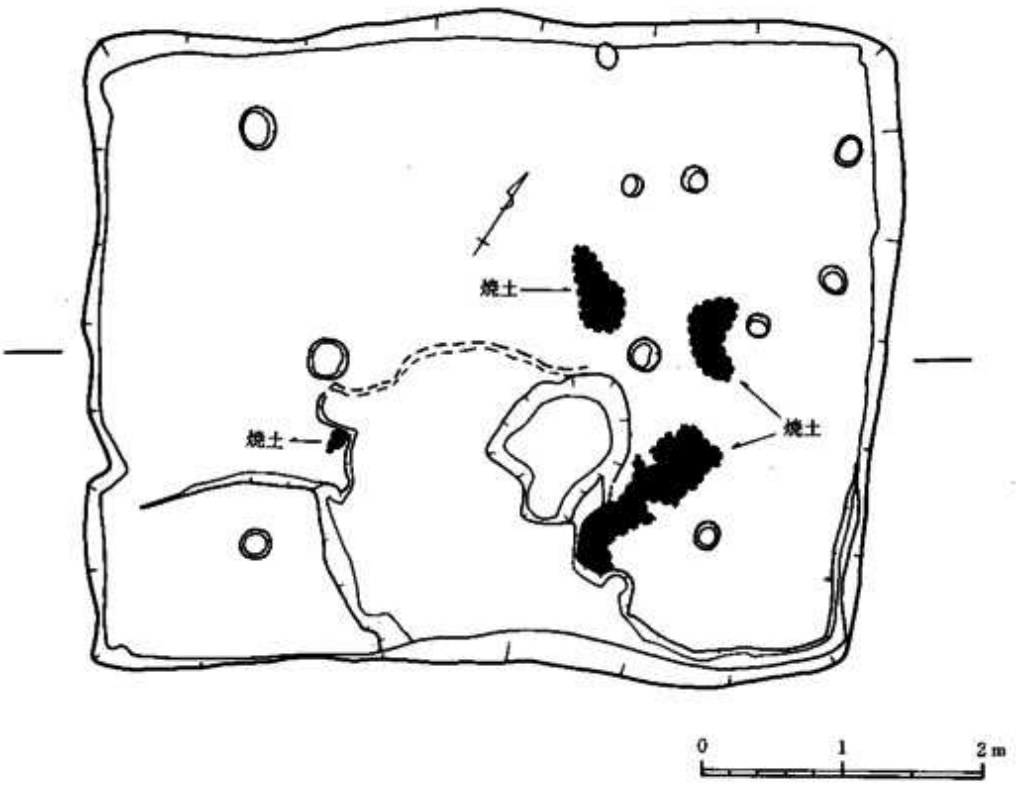
第４図　ＳＡ４出土遺物実測図（縮尺１／４）

表１　ＳＡ４土器観察表

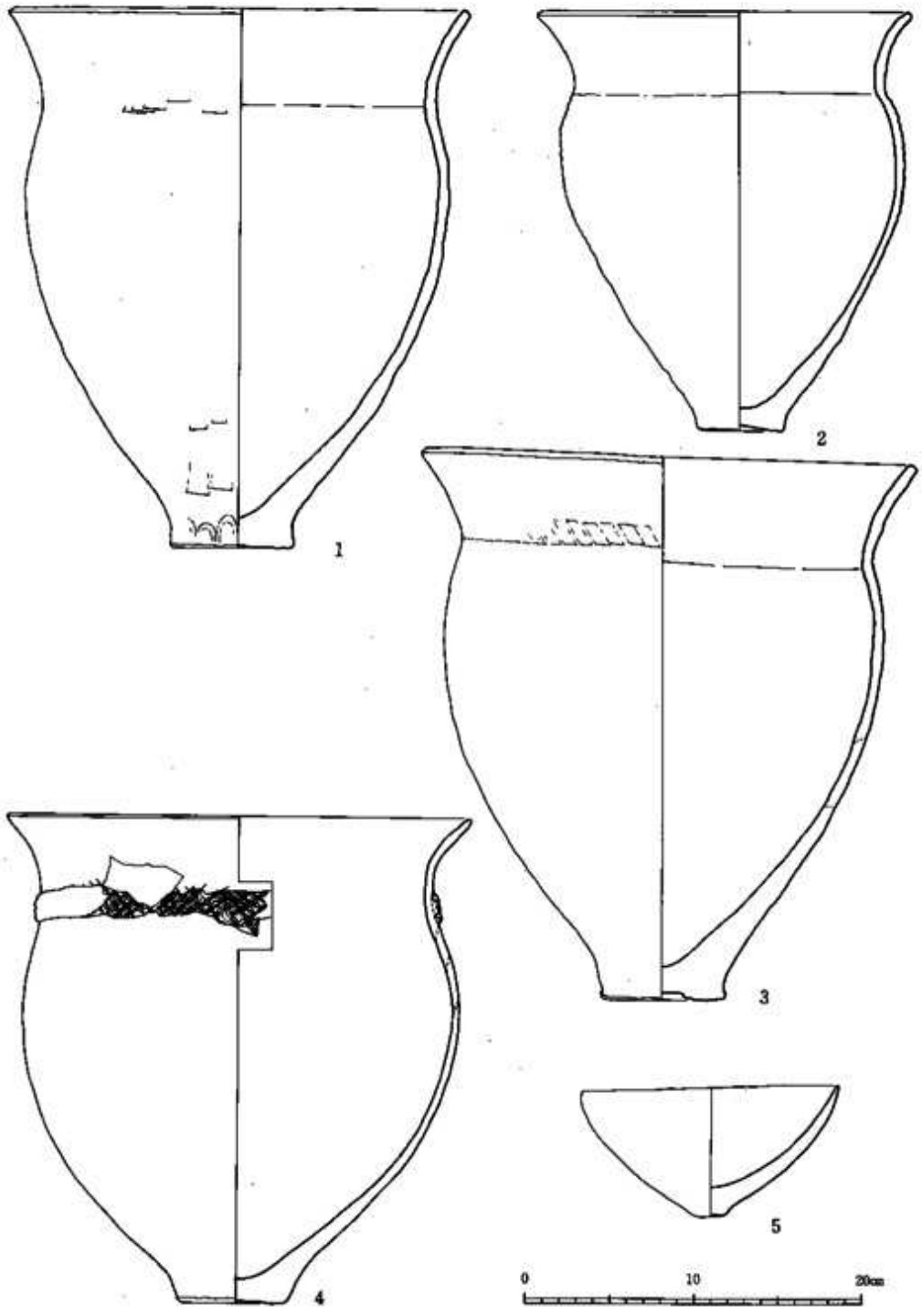
図面番号	遺物番号	遺構名	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考
第4図	1	ＳＡ４	甕	口縁部～頸部 横ナデ 頸部～胴下部 ナデ 胴下部 縦ハケ目	口縁部～頸部 横ナデ 頸部～底部 ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	0.5～1ミリ大の粒粒を多く含む	31.2	32.3	頸部外面強い指ナデ 底部やや上げ底 底径 6.3cm
*	2	*	壺	口頸部～口縁部 横ナデ 口縁部～口縁下部 縦ハケ目 口縁下部 一部丁寧なナデ	口縁部～口縁下部 横ナデ 口縁下部 横ハケ目後ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	0.5～1ミリ大の砂粒を多く含む	28.8	—	口縁上面 円形浮文

切り合いも考えられるため、今後の検討が必要と思われる。ＳＡ９、ＳＡ18、ＳＡ19では住居跡中央部南寄りに炭化物や焼土を含む掘り込みがみられる。

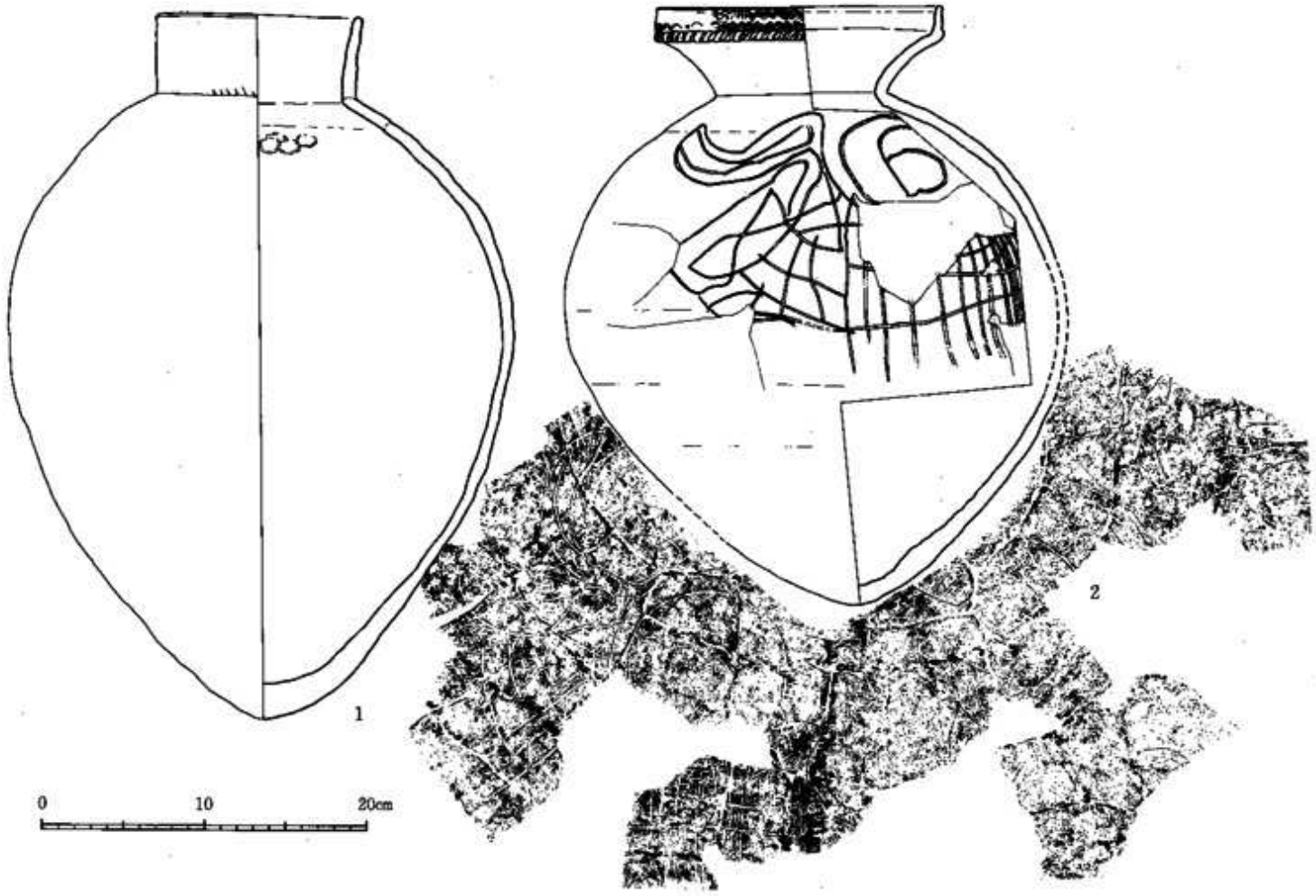
遺物は、甕が中心であるが、壷では櫛描波状文を施した二重口縁壷や頸部に４ヶ所の穿孔をもつ大型の壷もみられる。底部は丸底である。甕で特徴的なものとしては、頸部に刻目の突帯をもつものがある。塊状の坏部をもつ高坏やラッパ状にひらく器台の他、浅鉢、深鉢なども出土している。



第５図　ＳＡ18遺構実測図（縮尺１／60）



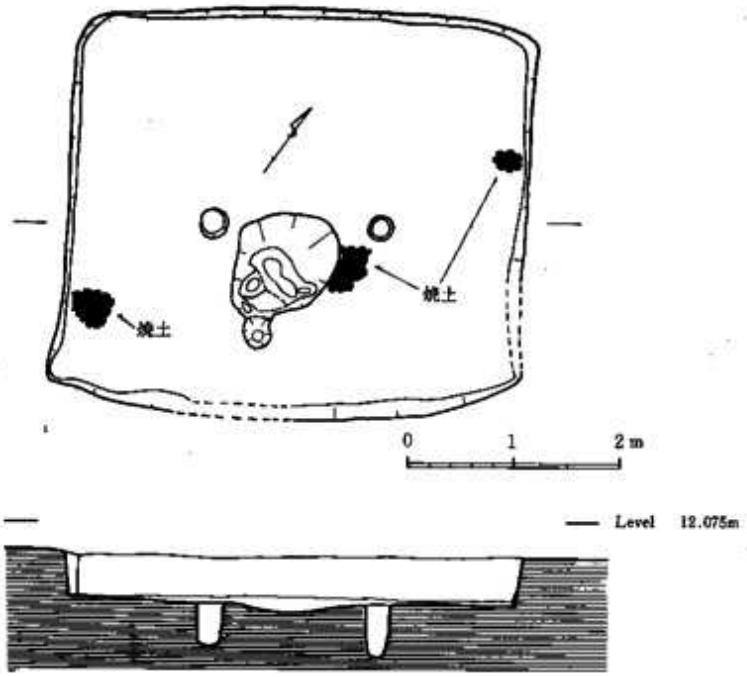
第6図　ＳＡ18出土遺物実測図（縮尺１／４）



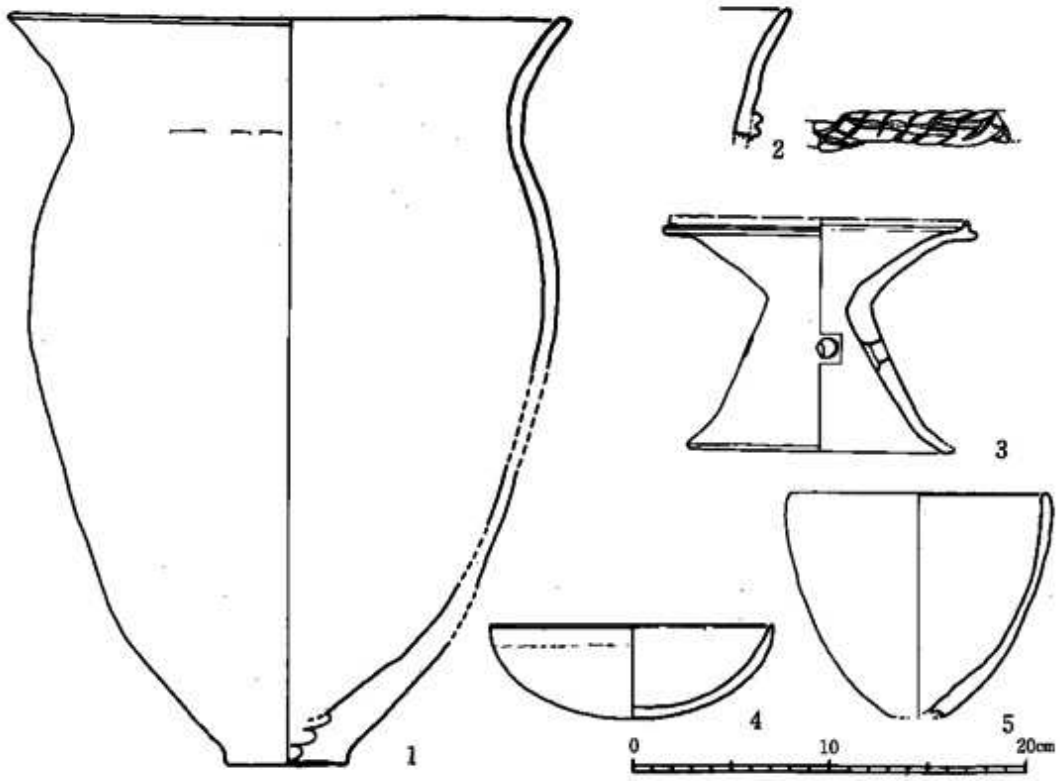
第7図　ＳＡ18出土遺物実測図・拓影（縮尺１／４）

表2　ＳＡ18土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考
第6図	1	ＳＡ18	壺	口縁部 頸部 胴部 底部 横ナデ ナデ 横ハケ目の後ナデ	口縁部 頸部 胴部 底部 横ナデ 斜ナデ 縦ナデ	良好	淡黄	浅黄橙	1～2mm大のうす茶色、黒色の砂粒を含む	26.6	32.0	底部 底径 やや上げ底 7.0cm
〃	2	〃	〃	口縁部 頸部 胴部 底部 横ナデ 荒い ハケ目 ナデ	横ナデ 口縁部に一部指頭痕	やや不良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2mm大の黒色灰色、うす茶色の砂粒を含む	21.8	25.0	底部 底径 やや上げ底 4.7cm
〃	3	〃	〃	口縁部 頸部 底部 横ナデ 斜ナデ	口縁部 頸部 胴部 底部 横ナデ 丁寧な ナデ 縦ナデ ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	2mm大の砂粒を含む	28.7	32.2	頸部外面 ハケ目単位残 底部 上げ底 底径 7.0cm
〃	4	〃	〃	口縁部 頸部 底部 横ナデ 丁寧な 斜ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	0.5～2mm大の褐色黒色、透明な砂粒を含む	27.2	29.0	頸部突帯 布巻ヘラ状工具での押圧刻み 底部 やや上げ底 底径 6.0cm
〃	5	〃	鉢	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	0.5～1mm大の白色茶色、灰色の砂粒を含む	15.0	7.7	底部 底径 やや上げ底気味 1.5cm
第7図	1	ＳＡ18	壺	口縁部 胴部 底部 横ナデ 斜ナデ ナデ	口縁部 頸部 胴部 底部 横ナデ 横ナデ 斜ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～3mm大の茶色や灰色の砂粒を含む	12.3	43.1	底部 尖底
〃	2	〃	〃	口縁部 頸部 胴部 底部 横ナデ 丁寧な 横ナデ 縦ナデ	口縁部 頸部 胴部 底部 横ナデ ナデ 指押え 横ナデ	やや不良	にぶい橙	橙	1～2mm大のうす茶色や黒色の砂粒を含む	17.3	36.7	二重口縁 櫛描波状文の下に刻み目突帯 胴部 沈線文 底部 丸底



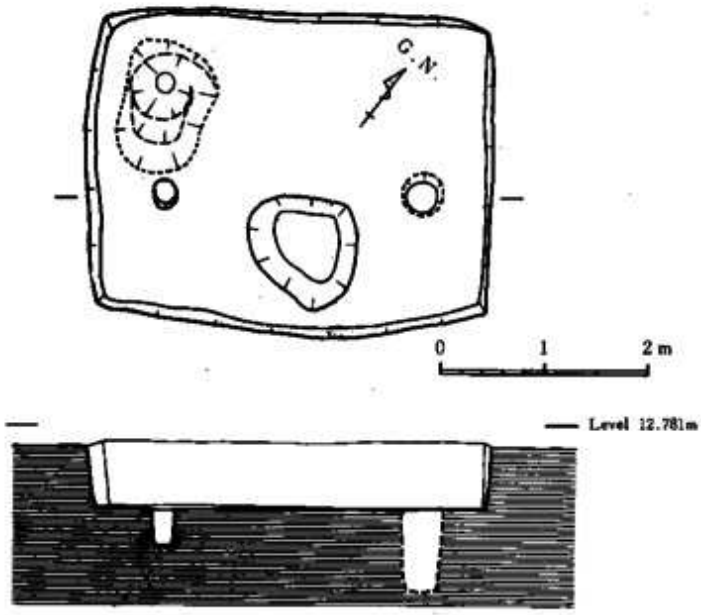
第８図　ＳＡ19遺構実測図（縮尺１／60）



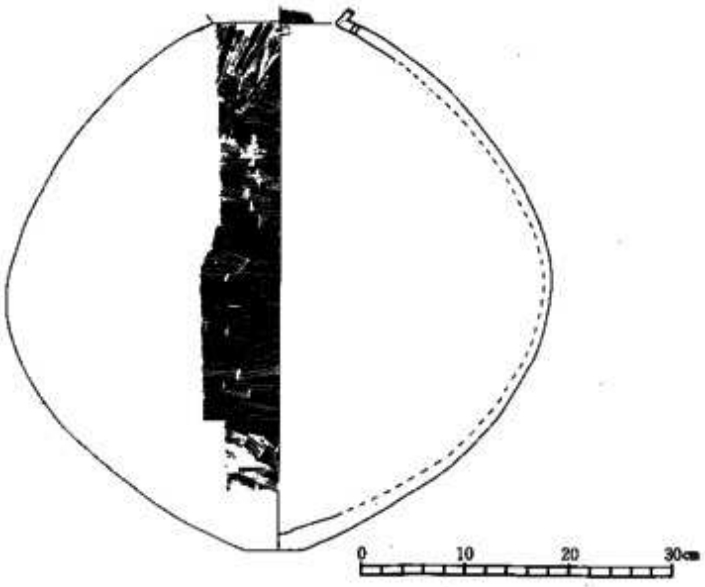
第９図　ＳＡ19出土遺物実測図（縮尺１／４）

表３　ＳＡ19土器観察表

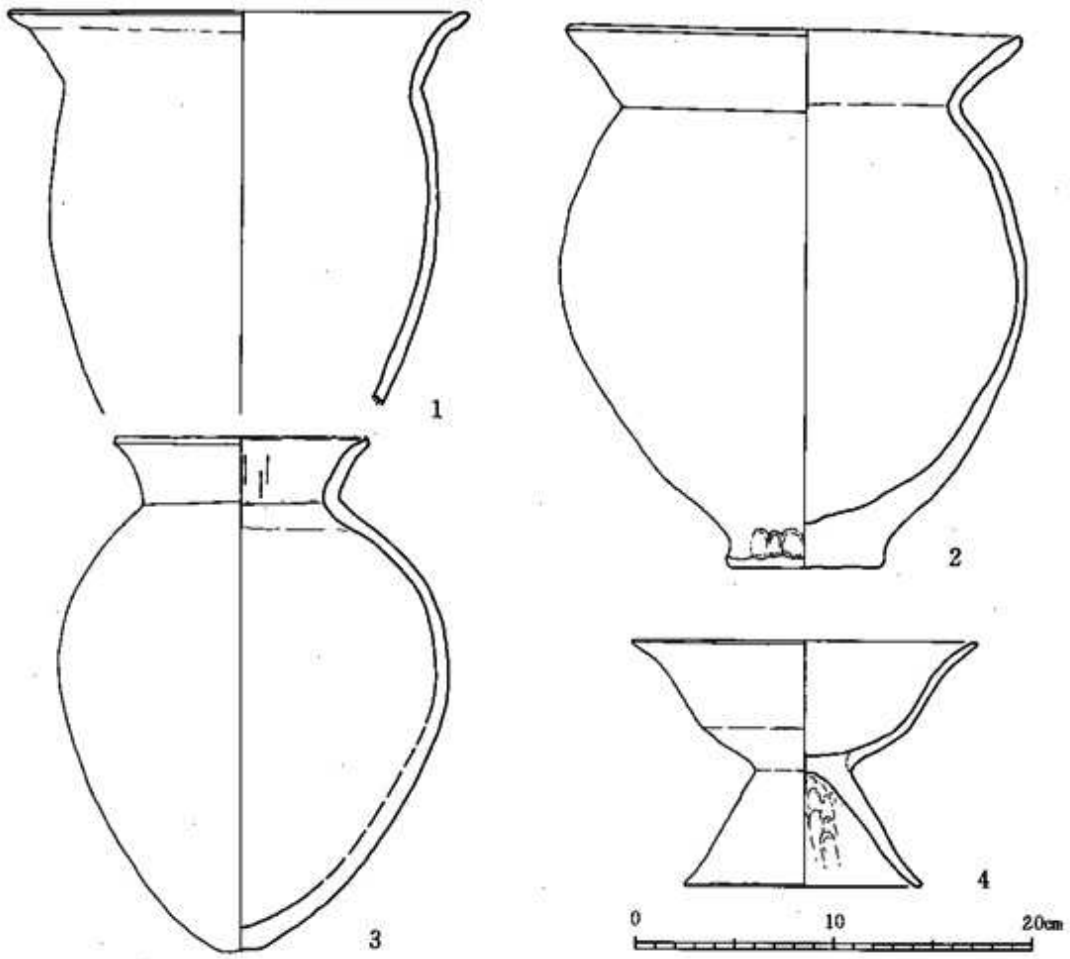
図面番号	遺物番号	遺構名	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考
第9図	1	ＳＡ19	甕	口縁部 横ナデ 頸部 縦ハケの後ナデ 斜部 横・斜ナデ 底部 ナデ	口縁部 横ナデ 頸部 横ナデ 胴部 縦ナデ 底部付近	良好	にぶい黄橙	浅黄橙	1～2mm大の茶色や灰色の砂粒を含む	27.7	38.1	底部 やや上げ底気味 底径 5.9cm
〃	2	〃	〃	横ナデ	ナデ	良好	淡橙	にぶい黄橙	1～2mm大の白色灰色、茶色の砂粒を含む	—	—	頸部 刻み目突帯
〃	3	〃	器台	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	0.5～1mm大の灰色茶色、うす茶色の砂粒を含む	推定 15.0	11.9	脚部 4ヶ所穿孔
〃	4	〃	壺	口縁部 丁寧なナデ ～ ハケ目後ナデ 底部	丁寧な横ナデの後ミガキ	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm大の金雲母、角閃石の鉱物粒を含む	推定 14.3	4.8	
〃	5	〃	鉢	口唇部 横ナデ ～ 斜ナデ 底部付近	口縁部 横ナデ ～ 胴部 ナデ ～ 底部付近	良好	にぶい橙	橙	1～2mm大の灰色茶色、うす茶色、光る砂粒を含む	推定 12.9	—	



第10図　ＳＡ９遺構実測図（縮尺１／60）



第11図　ＳＡ９出土遺物実測図(1)（縮尺１／６）



第12図　ＳＡ９出土遺物実測図(2)　（縮尺１／４）

表４　ＳＡ９土器観察表

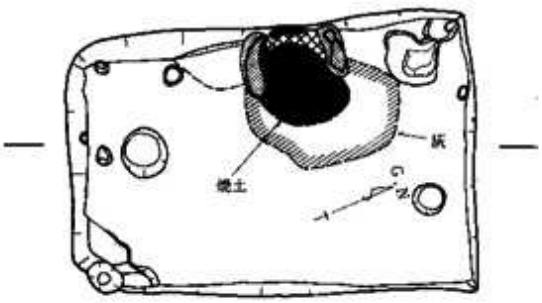
図面番号	遺物番号	遺構名	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考
第12図	1	ＳＡ９	壺	口縁部 ～ 頸部 ～ 胴部 横ナデ 一部 指頭痕 ナデ	口縁部 ～ 頸部 ～ 胴部 横ナデ 斜方向のナデ	やや不良	にぶい橙	にぶい橙	1～2mm大の灰色やこげ茶色の砂粒を含む	23.0	—	
〃	2	〃	〃	口縁部 ～ 頸部 ～ 底部 横ナデ 斜方向のナデ ナデ一部 指頭痕	口縁部 ～ 頸部 ～ 底部 横ナデ ナデ 一部 指頭痕	良好	浅黄橙	浅黄橙	1～3mm大の茶色や灰色の砂粒を含む	22.8	27.4	底部 平底 底径 7.6cm
〃	3	〃	壺	口縁部 ～ 頸部 ～ 胴部 ～ 底部 横ナデ 縦ナデ 縦ナデ ナデ	口縁部 ～ 頸部 ～ 胴部 ～ 底部 横ナデ 縦ハケ目 ナデ	良好	明黄褐	黄橙	0.5～1mm大の茶色灰色、光る砂粒を含む	12.6	25.9	底部 小さい平底 未調整 底径 2cm
〃	4	〃	高坏	坏部 ナデ 脚部 縦ナデ	坏部 ナデ 脚部 脚スソ ナデ 指押え後 ナデ ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	1～3mm大の砂粒を含む	17.3	12.5	底径 11.6cm
第11図		ＳＡ９	壺	頸部 ～ 胴下部 ～ 底部 ハケ目 ナデ	頸部 ～ 胴上部 ～ 底部 ハケ目 指ナデ 指頭痕 ナデ	良好	にぶい橙	—	1～2mm大の白色黒色、光る砂粒を含む	—	—	頸部直下 4ヶ所穿孔有 底部 平底 底径 5.5cm

古代・中世

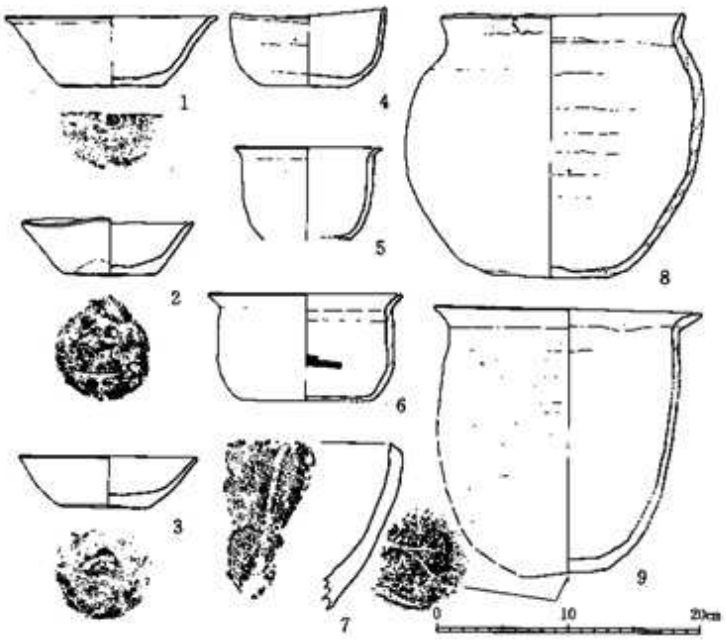
古代の遺構としては竪穴住居跡15軒が検出された。うち、カマドを持つ住居跡10軒、カマドを持たない住居跡５軒である。カマドのタイプとしては、煙道をもたないもの（ＳＡ20）煙道を壁面から地中に掘り込んでいるもの（ＳＡ13など）、煙道を掘り込み粘土等で天井部を補強するもの（ＳＡ15など）の３タイプに分けられる。カマドの位置は、北西～北東にかけての一壁に設置されているものが多い。カマド内に、支脚に用いたと思われる石がおかれているものもある（ＳＡ13、ＳＡ16など）。住居跡の規模は3.5m ×2.5m（ＳＡ20）や、３m ×３m（ＳＡ13）など床面積10㎡以下の小型のものが主流をなす。大型のものでも4.5m ×4.5 m と床面積20㎡を超えるもの（ＳＡ７）が１軒みられるのみである。柱穴は２本柱のものが多い。

一方カマドを持たない住居跡も方形プランを呈しており、規模もＳＡ１で2.5m ×2.5m と床面積も６㎡程度の小型のものが多い。柱穴は２本柱のものが多い。ＳＡ１も２本柱であるが壁対にみられる。

遺物は、土師器甕・鉢、土師皿、布痕土器、内黒土器などがみられる。甕は高さ20cm前後の小型のものが多く、木ノ葉底もみられる。土師皿はヘラ切り底である。鉢は平底で口縁部



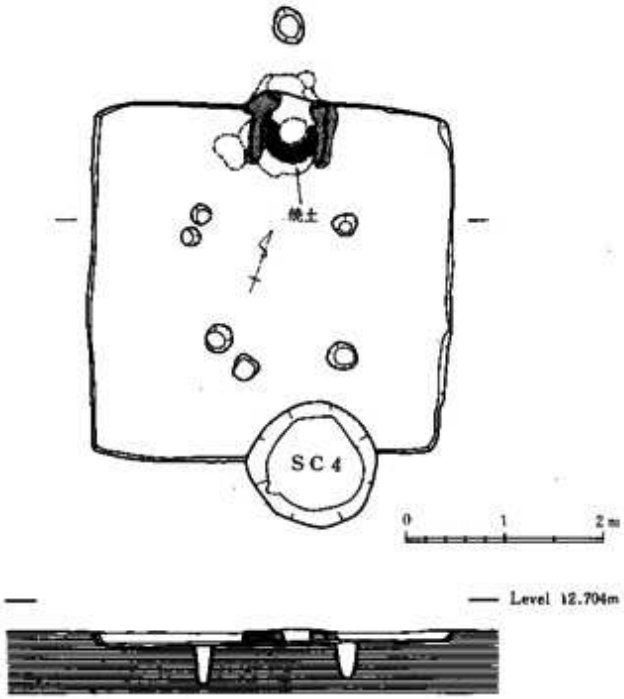
第13図　ＳＡ20遺構実測図（縮尺１／60）



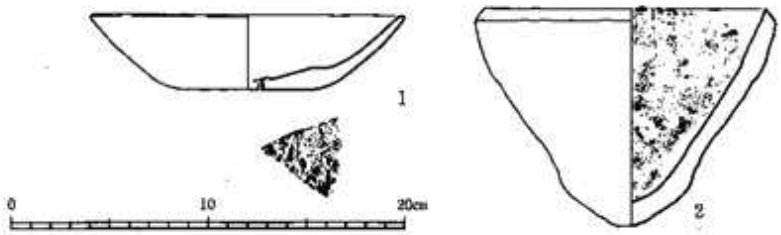
第14図　ＳＡ20出土遺物実測図・拓影（縮尺１／４）

表５　ＳＡ20土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考
第14図	1	ＳＡ20	坏	横ナデ	横ナデ	良好	淡黄	淡黄	1mm大の砂粒を含む	15.8	5.3	底部 ヘラ切り 底径 7.3cm
〃	2	〃	〃	横ナデ	横ナデ	やや不良	浅黄橙	橙	1～2mm大の灰色、白色、黒色の砂粒を含む	12.8	4.0	底部 ヘラ切り 底径 6.9cm
〃	3	〃	〃	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	黒色、光る砂粒を含む	13.3	3.9	底部 ヘラ切り 底径 6.2cm
〃	4	〃	鉢	荒い横ナデ	荒い横ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～3mm大の茶色の砂粒を含む	11.5	5.1	
〃	5	〃	鉢	口縁部～胴上部 横ナデ 胴上部～底部付近 ナデ	荒い横ナデ	やや良	にぶい橙	にぶい橙	1～3mm大の灰色や茶色の砂粒を含む	11.0	—	
〃	6	〃	〃	口縁部～胴部 横ナデ 胴部～底部 ナデ	口縁部～胴部 横ナデ 胴部～底部 斜ハケ後ナデ	不良	灰黄褐	褐灰	1～3mm大のうす茶、灰色、黒色の砂粒を含む	推定14.4	8.2	底部 平底 木の葉圧痕 底径推定10.1cm
〃	7	〃	〃	指頭痕と思われる凹凸	布痕	良好	橙	橙	3～5mm大の赤色の砂粒を含む	—	—	1cmあたり 縦糸 7本 横糸 7本
〃	8	〃	壺	口縁部～胴部 横ナデ 胴部～底部 ナデ上げ横ナデ	口縁部～胴部 荒い横ナデ 胴部～底部 横ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	1～3mm大の灰色や茶色の砂粒を含む	18.3	20.0	底部 平底 底径 8.8cm
〃	9	〃	〃	口縁部～胴部 横ナデ 胴部～底部 ナデ	口縁部～胴部 横ナデ 胴部～底部 ナデ	良好	浅黄橙	にぶい橙	1～3mm大の灰色や茶色の砂粒を含む	推定20.1	20.2	底部 平底 木の葉圧痕 底径 6.4cm



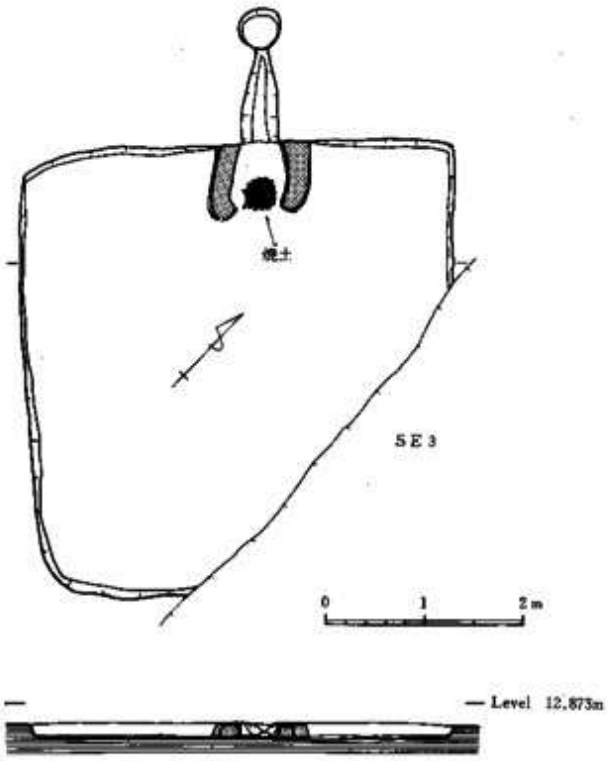
第15図　ＳＡ３遺構実測図（縮尺１／60）



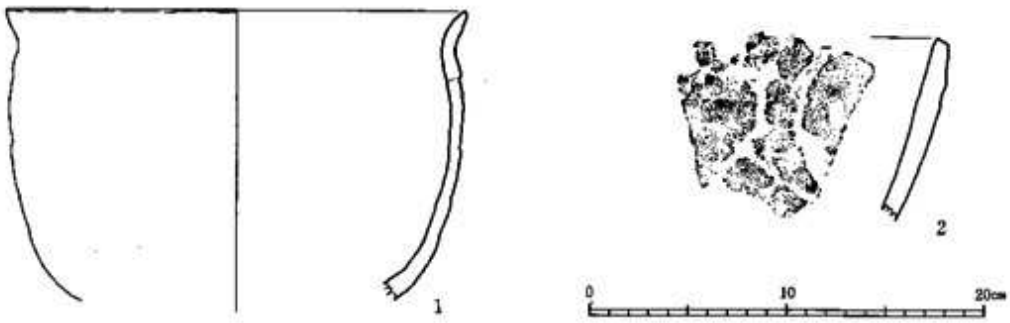
第16図　ＳＡ３出土遺物実測図・拓影（縮尺１／４）

表6　　ＳＡ３土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考
第16図	1	ＳＡ３	坏	横ナデ	横ナデ	良好	橙	橙	精良	推定 15.9	推定 3.8	底部ヘラ切り 底径 推定 6.8cm
〃	2	〃	鉢	指頭痕と思われる凹凸ナデか	布痕	やや良好	橙	橙	精良 3㍉リ程度の砂粒を含む	推定 14.3	11.1	1㎠あたり 縦糸９本 横糸10本



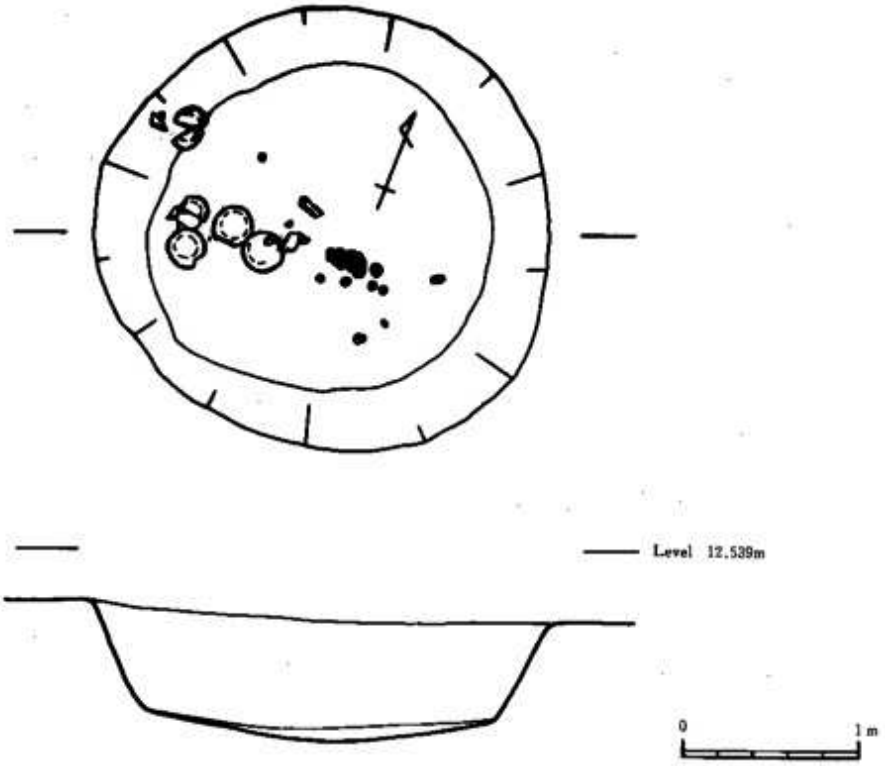
第17図　ＳＡ７遺構実測図（縮尺１／60）



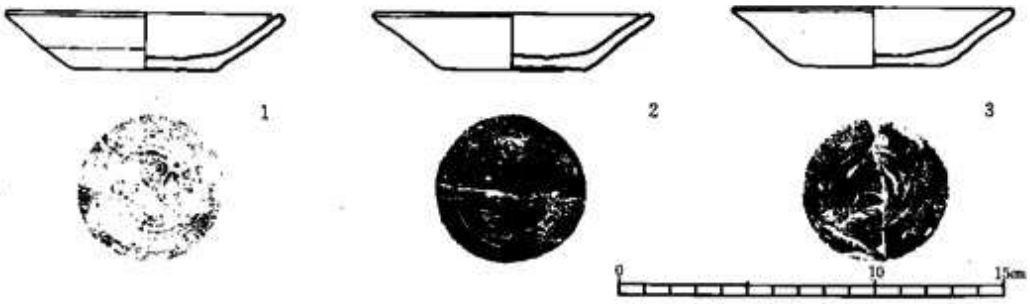
第18図　ＳＡ７出土遺物実測図・拓影（縮尺１／４）

表７　ＳＡ７土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考
第18図	1	ＳＡ７	甕	横ナデ	横ナデ	やや不良	橙	橙	１～３ミリ大の茶色や白色の砂粒を含む	推定23.3	―	頸部 指ナデ
〃	2	〃	鉢	ナデ	布痕	やや良好	橙	橙	１～５ミリの砂粒をわずかに含む	―	―	１㎠あたり縦糸10本 横糸９本



第19図　ＳＣ４遺構実測図（縮尺１／20）



第20図　ＳＣ４出土遺物実測図・拓影（縮尺１／３）

表８　ＳＣ４土器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考
第20図	1	ＳＣ４	皿	横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	精良	10.7	2.2	底部 ヘラ切り 底径 5.6cm
〃	2	〃	〃	横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	精良	10.7	2.2	底部 ヘラ切り 底径 5.8cm
〃	3	〃	〃	横ナデ	横ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	精良	10.7	2.3	底部 ヘラ切り 底径 5.5cm

が外反するものもある。ほとんどの住居跡から布痕土器片がみられ、内黒土器との共伴のものもあり平安期の住居跡群と思われる。なお、ＳＡ１からは政和通宝（12世紀初頭）１枚が出土している。

古代～中世にかけての遺構として溝状遺構と掘立柱建物跡がある。溝状遺構は遺跡を切断形で南北方向に約10条を数える。幅は１～1.5ｍで断面はＶ字、Ｕ字とある。排水路的なもの（ＳＥ１など）、陸橋部をもつもの（ＳＥ８）、中央部床が硬くなっており道的な性格をもつもの（ＳＥ５など）などがある。遺物は土師器片、土師皿片、布痕土器片、陶磁器片、土錘などがみられる。掘立柱建物跡はＳＥ８より東側に12棟確認されている。柱穴内からは土師皿（ヘラ切底、糸切り底）が主に出土する。

また、ＳＡ３を切る形で中世土壙墓（ＳＣ４）が１基確認された。直径約１ｍの円形土壙内の中央に骨片・歯等が置かれており両脇に土師皿（ヘラ切底）７枚と洪武通宝等の古銭約50枚が共献されている。

その他、土師器片等を出土する土壙（方形、円形）が10数基確認された他、遺物としては、14世紀代のものと思われる古瀬戸の灰釉水滴などもみられる。

Ⅳ、まとめ

縄文早期の集石遺構は、学園都市遺跡群内でも堂地西遺跡をはじめ小山尻東遺跡、浦田遺跡、赤坂遺跡、前原西遺跡、前原北遺跡など10数遺跡で確認されている。共伴土器も隆起線文土器をはじめ、押型文、貝殻条痕文、縄文、撚糸文、無文等の土器片がみられる。陣ノ内遺跡の集石遺構は、学園都市内でも前原西、前原北両遺跡と同じく標高11～12ｍと低地に分布する。また、13基の集石遺構とも規模、構造が類似しており、共伴遺物もほとんどが押型文（山形）である点から時間的な差はないと思われる。

弥生時代の住居跡群は堂地東遺跡をはじめ熊野原遺跡、前原北遺跡、浦田遺跡などでみられる。後期前半～終末期にかけての間仕切り住居跡が中心であるが、方形の住居跡も中期後半や後期前半および終末期に数軒みられる。陣ノ内遺跡検出の方形住居跡から出土した逆Ｌ字状口縁をもつ甕は中期の様相をもち、堂地東遺跡などでみられる間仕切り式の竪穴住居跡に先行するものである。

古墳時代の住居跡群は熊野原遺跡、前原南遺跡、前原北遺跡でみられる。時期的には前原北遺跡が須恵器共伴の時期まで続くが、いずれも前期を中心とする集落跡である。陣ノ内遺跡も共伴遺物として櫛描波状文を施した二重口縁壺や頸部に刻目突帯をもつ甕などがあり、遺跡群内の他の遺跡と同じ時期の集落跡と言える。

古代・中世の遺跡は、掘立柱建物跡群を中心に遺跡群ほぼ全域に分布するものと思われる。そのうち、古代の住居跡として赤坂遺跡、下田畑遺跡、前原南遺跡等でカマド付竪穴住居跡が、また、小山尻東遺跡で竪穴住居跡が確認されているが、いずれも1～2軒と数が少ない。その点、陣ノ内遺跡で検出された古代の住居跡群はカマド付竪穴住居跡が10軒、竪穴住居跡が5軒の計15軒から成っており遺跡群最大の古代集落跡と言える。さらに、構造面からタイプの違うカマドが共存しており、宮崎市浄土江遺跡等でみられるカマドの変遷について、さらに詳細な分析が可能となった。

一方、中世遺構についても、前原西遺跡で見られた中世方形周溝墓と陣ノ内遺跡の中世土壙墓との比較検討をはじめ、掘立柱建物跡の構成や溝状遺構の性格づけなど、隣接する車坂城跡との関連についても今後検討していかなければならない。　　(永友良典)

参考文献

宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報』(Ⅰ)～(Ⅴ) 1981年～1986年

宮崎県教育委員会『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集、第3集　1985年

宮崎市教育委員会『宮崎市文化財調査報告書6　浄土江遺跡』　1981年

KURUMA ZAKA

車　坂　城　跡

Ⅰ、遺跡の位置と歴史的環境

宮崎学園都市遺跡群の大半は清武川と加江田川とに挟まれた舌状台地上に展開している。この台地は鰐塚山系の尾根から北東へのびる丘陵の端部にあたり西から東へと緩傾斜しているが、東～東南端は再び比高差約20mの丘陵地帯となっている。丘陵地帯の中央部は標高36m前後の平坦地で木花公園として現状保存される予定の木花遺跡である。一方、北端と西南端の丘陵地は谷によって隔てられ、その地形を利用して中世山城が営まれている。この北端丘陵が昨年度調査した今江城（仮称）跡で西南端が土橋によって接続する当車坂城跡である。

車坂城跡は北東の丘陵地帯を除けば割合視界がひらけており、南側は比高差約35mの急斜面をなして眼下に沖積水田地帯が広がり、加江田川を挟んだ対岸には鉢巻(くんばら)山系の山々が連なる。また、東側は曾山寺沖から遠く青島付近を含む日向灘を展望でき、北側は今江城跡及びその先の本郷南方の水田地帯、北西へ連なる清武の丘陵地帯と清武城跡を遠望できる。そして、西側は広い熊野の台地あるいは旧飫肥街道筋の鏡洲から加江田川が流れ下って沖積水田へとひらける竹内のあたりを広く俯瞰できる等立地条件は良好である。昨年調査された今江城跡が北方に対し展望がきいていたのに比べ当車坂城跡はどちらかというと南に対して展望がきくといえよう。

次に車坂城をとりまく歴史的環境について先学の文献をたよりに触れておきたい。(1)

車坂城跡は宮崎市大字熊野字古城に位置する。古代、この熊野の地は『延喜式』にみえる日向16駅のひとつ救麻駅の所在地に比定されており、鎌倉時代初期には建久8年（1197年）に出された『建久図田帳』の中の国富(くどみ)荘限野の地に比定されている。国富荘の開発は在庁官人であった日下部氏らによって行われ、その中心は大淀川以南（河南）の国富本郷にあったと考えられている。本郷は現在の宮崎市本郷南方・北方付近に比定され、熊野からは北へ約4km程の近接地である。

この国富荘は日下部氏らによって開発されたのち保元の頃（1156～1159年）には八条女院を本家として女院領に組み入れられたと考えられる。その後寿永3年（1184年）平氏滅亡後没官領となったがその年4月には平頼盛に安堵され、頼盛が領家となっている。一方、土着勢力の日下部・土持両氏からみた国富荘は『日下部姓之系図』によると久安5年（1149年）、日下部盛平が日下部氏の正統を継いだ時、河南本郷郡司その他の職を兼ねたとあり、また、その後文治3年（1187年）盛平が養子にしたとされる土持栄妙宣綱に在国司職その他日下部氏の正統を全て譲ったことにより土持氏は国富荘の中心地国富本郷にも進出、そして、この地は後の南北朝時代には土持氏の主要な根拠地になったと考えられている。また、先の建久図

1．車坂城跡
2．陣ノ内遺跡
3．今江城(仮称)跡
4．前原北遺跡
5．前原西遺跡A地区
6．熊野原遺跡C地区
7．堂地東遺跡
8．平畑遺跡
9．小山尻西石塔群
10．山内石塔群
（以上、学園都市遺跡群）
11．勢田寺跡
12．文永寺跡
13．井手ケ城跡
14．古城跡
15．清武城跡
16．登能尾山跡
17．曽井城跡
18．古城跡
19．山ノ城跡
20．本城跡
21．蓬莱山城跡
22．紫波洲崎城跡
23．内海峠城跡(推定位置)

第21図　車坂城跡周辺遺跡位置図

田帳によると土持氏とともに国富荘のうち加納、加江田、隈野には地頭平五の名がみられる。

国富荘は建暦元年（1211年）八条女院の死後皇族領となっていたが、建武中興の際、後醍醐天皇から足利尊氏に与えられている。そして、この後日向と深くかかわる伊東氏は先に建長4年（1252年）前後に庶子が下向し田島・門川・木脇の各氏を興していたが、建武2年(1335年）に至り足利尊氏の命を受け本統伊東祐持が国富荘とその背後にある尊氏の妻方の所領である穆佐院の確保のため日向に下向してきており、同時に恩賞として与えられた児湯郡都於郡に日向経略の基盤を築いている。また、その子祐重は正平3年（1348年）伊東本統の全てを都於郡に移している。こうして伊東氏は南北朝時代を通じて足利氏に属しつつ、当時国富荘を掌握していた土持宣栄ら土持氏とも協力や対立を繰り返しながら旧宇佐宮領を中心に経略を進めてゆくのである。暦応3年（1340年）足利尊氏は国富荘を天竜寺に寄進しているが、その後天授5年（1379年）には実質的にこの地を支配してきた伊東・土持の両氏により分領され、本郷は伊東氏、加納は伊東氏の支族清武氏、隈野は土持氏の支族熊野氏、加江田は同支族の岡富氏の領するところとなる。一方、この頃島津氏の方は5代貞久が元弘3年（1333年）日向・大隅の守護職を付加され、建武2年（1335年）にはその弟の時久が新納院地頭職に着き児湯郡高城（木城町）に居を構え新納氏を興すなど次第に山東の地にも進出の足掛りを求めてきている。その後正平5年（1350年）にこの新納院高城は足利氏の将畠山義顕により攻め落とされたが、島津氏は南北朝時代を通じて山東の地をしきりと窺うのである。

このように熊野の地は勢力拡大をはかる伊東氏と山東をねらう島津氏の最前線のひとつとして幾度かの攻防の場となるのであるが、文安元年（1444年）伊東祐堯が島津氏に応じた曽井氏を攻め落とし本郷・鏡洲・熊野を含む曽井氏領をその所領として以来、天正5年（1577年）島津氏に敗れた伊東義祐の豊後落ちまで約130年間ほぼ伊東氏が領することになる。その後天正15年（1587年）まで島津氏領となるものの、九州を制圧した豊臣秀吉によって同年伊東義祐の子祐兵が曽井に封ぜられ、翌16年（1588年）祐兵が飫肥に移って以来幕末までこの地は飫肥藩伊東氏領として明治を迎える。

次に車坂城をめぐる攻防についても触れておきたい。

幕末清武郷に生まれた平部嶠南の著した『日向地誌』には『日向記』、『西藩野史』からの引用として車坂城跡のことが記されている。それによると車坂城は「加江田車阪城」となっており当時この地は加江田とも呼ばれていたらしい。また、車坂城については築造の年月は不明とされているが、熊野の地は天授5年（1379年）土持氏の支族熊野氏の所領となっており、天授～応永年間の初年頃までは熊野某の居城となっていたところを都於郡城主伊東祐立

が攻め取ったとある。しかし、この伊東祐立は応永34年（1427年）伊東氏4代を継ぐのであってこの頃はまだ都於郡城主は父祐安であったと考えられる。その後間もなく鹿児島領主島津元久がこの城を攻め取り城塁を修築し、その将阿多加賀守を置くことになる。このことは文明14年（1482年）までに記された島津氏の一族山田聖栄の『山田聖栄自記』には次のように載っている。「是も元久御代山東加江田倉そこノ城責落之時合戦（朱書、「応永十年癸未也」）、新納殿内限江方討死、敵ニ者宮崎之手ニ数十人被討畢、加江田本城ハ取誘、阿多加賀守被差置」。この加江田本城というのが車坂城のことと思われ、先の日向地誌の記述はこの応永10年（1403年）の戦いをさすものと考えられる。これに先立つ応永4年（1397年）島津元久は初めて山東の清武城を攻め、伊東・土持の両氏と戦っている。伊東祐立が清武城に近い車坂城を攻め取ったのはこの伊東・土持両氏の協力体制の後であろうか。日向地誌によると車坂城はその後再び伊東氏に奪い返されている。応永26年（1419年）島津氏はその将伊作氏兄弟に車坂城を攻め取らせ一度は手中に握る。が、すぐにまた伊東祐立はこれを取り返している。そしてさらに内海峠城にも兵をおき南方に備えている。ところで車坂城が応永10年の戦いの後再び伊東氏領に復していた応永19年（1412年）伊東祐立は島津氏に応じた同支族の曽井氏を攻めているが、この時加江田の兵も島津方に属しており、この「加江田ノ兵」というのが車坂城の守兵のことではないかと思われる。さらに日向地誌によると、この後応永30～31年（1423～1424年）にかけて島津久豊は油津から海上を北上し内海峠城、車坂城を攻め、祐立と戦っている。この時車坂城は島津久豊の手に落ち、久豊は城塁を修築、その後9代忠国は20余年にわたってこの城を維持したと記されている。しかし、文安元年（1444年）曽井氏が再び島津氏に応じた際、祐立の子祐堯が曽井氏を攻めその所領を奪ったが、この中に本郷、熊野鏡洲などの地名もみえ、文安元年より先に車坂城周辺は伊東氏支族曽井氏領に復していた可能性がある。ただ、車坂城は「加江田車阪城」とも呼ばれ、この時の所領の中に加江田の地名がみられないことから、あるいはまだ島津氏領であったかもしれない。

日向地誌には文安の頃から車坂城は再び伊東氏領となったが永禄11年（1568年）の日向記の伊東氏48城の中にその名がみえないことから、永禄の頃には既に廃城となり守将もおかれていなかったものとされている。車坂城が文安の頃再び伊東氏領に復して後、長禄2年（1458年）には島津氏の一族新納氏が飫肥を領有しており、文明12年（1480年）島津氏は紫波洲崎城を攻め取ったが直ちに伊東祐国に追い返されている。日向地誌の内海峠城の項に車坂城について、この時「伊東祐国即日加江田ニ出馬ス。車坂城ノ薩兵城ヲ焼テ遁ル」とあり、少なくとも1480年頃はまだ車坂城は廃城にはなっていなかったものと思われる。

以上のように当車坂城跡については、文献内容の考証も勿論なされなければならないが、断片的にではあるがその歴史上の流れが把握できる。日向地誌にみえるだけでも島津氏側の修築の記録が2回。これに記録されていない土持氏や伊東氏の修築、近世～昭和までの開墾による改変、近年の採土による破壊など考えあわせると、様々に手が加えられてきた結果が現在の車坂城跡の姿であるといえよう。そして、車坂城跡は伊東・島津両氏の攻防に応じ、その時々に南向きの備えがなされたりあるいは北～北西向きの備えがなされてきたであろうことが文献からも読み取れよう。

最後に車坂城跡周辺の中世の遺跡について述べておく（第21図）。

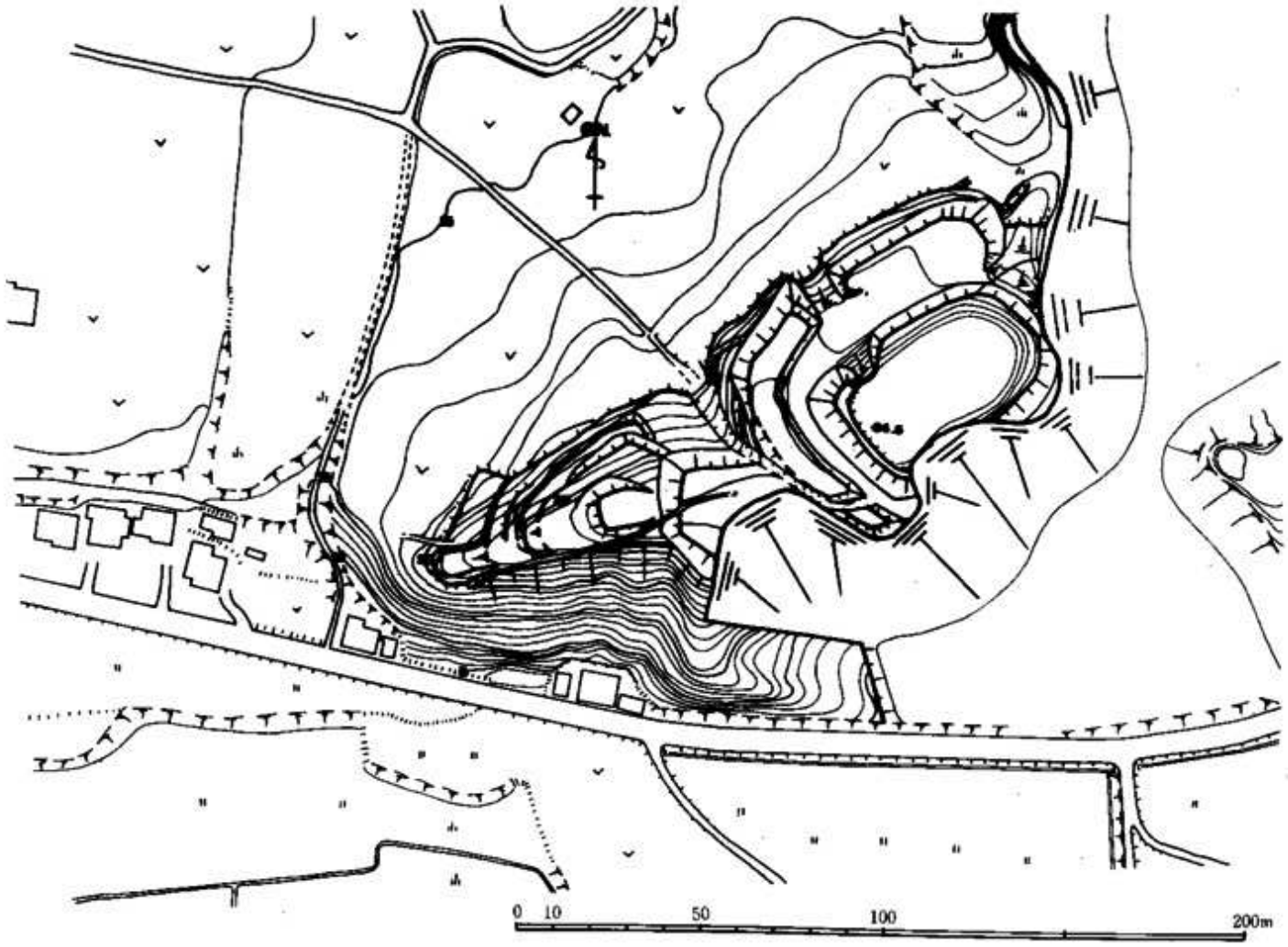
ほぼ同時代の山城としては曽井城跡、清武城跡、紫波洲崎城跡、内海峠城跡などが知られている。このほかに同じ学園都市遺跡群内では、本報告に掲載した陣ノ内遺跡で土壙墓や掘立柱建物跡が、前原北遺跡（13世紀を中心に14～15世紀）、熊野原遺跡C地区（14～15世紀）、平畑遺跡（13世紀代～14世紀前半）、堂地東遺跡（13～16世紀前半）で掘立柱建物跡群が検出されている。また、前原西遺跡A地区（14～15世紀）では周溝を持つ土壙墓が、山内石塔群（13世紀後半～17世紀の主に詣り墓）や小山尻西石塔群（15世紀前半）、堂地東遺跡（15世紀代）では五輪塔や板碑類が出土している。さらに城跡としては、車坂城と一連の丘陵北端に今江城（仮称、15～16世紀前半が主）跡が位置している。

註(1) 日高次吉 『宮崎県の歴史』 山川出版社 1970年
主に上記の文献をたのみに書いた。日高次吉氏は、『建久（日向）図田帳』、『宇佐宮御神領大鏡』、『日向記』、『日向纂記』、『日向地誌』、『日向国史』、『日向古文書集成』 その他を参考に書いている。

Ⅱ、調査の概要

車坂城跡は現在幾度かの土取りによってその多くを失ってしまっている。明治初年に著された『日向地誌』には土取りされる以前の車坂城跡について次のように記されている(一部、読み易いように改めた)。

「車坂城墟　　木花山ヨリ南ニ連ナリ加江田川上ニ突出セシ長岡ナリ。東ハ正連寺水田ニ臨ミ南ハ加江田川ヲ帯ビ西ハ環スルニ数十町ノ深田ヲ以テス。要害頗ル険固ナリ。其頂、今皆畦圃トナレドモ城形猶存ス。城、画シテ六区トナル。其間、皆深隍ヲ鑿チテ要害トス。本丸



第22図　車坂城跡現況概念図

ハ方22～23間、四旁、皆断崖壁立。此ト一隍ヲ隔テ東北ニアルヲ北ノ城ト云。又一町許離レテ西南ニアルヲ西ノ城ト云。西ノ城ト本城トノ中間ニ二岡アリ。南ナルヲ幸乗屋敷ト云。蓋シ、幸乗ト云者ノ居リシ所ト見ユ。北ナルハ稍、陋小ナリ。城名伝ハラズ。又、幸乗屋敷ヨリ南ニ突出セシ一岡ハ、段別大約西ノ城ト斉シ、亦城名伝ハラズ。」

これによると当車坂城跡は、「車阪城」の中の本丸より一町程西南に位置する「西ノ城」跡と言われるものと考えられる。その後、昭和45年発行の地図では既に大きく土取りされた様子がみられ、わずかに「本丸」の一部あるいは「北ノ城」と思われる部分が残されているが、昭和53年頃埋立用の土取場となり、再び採土されて現在に至っている。

今回調査を始めるにあたり、自然地形に人の手を加えていると思われる平坦面や傾斜面等の概略を作図した（第22図）。築城時の改変、修築時の改変、後世の改変等が加わっているものと考えられるが、現状では、採土によって南東側が急崖化した曲輪を中心に北西側に帯曲輪が巡り、南西側には空堀と土塁が巡っている様子がみられる。そして、曲輪の南西端から西側の一部にかけて土塁が築かれ、その北側の端は下段の帯曲輪の西端に対応し大きく開く虎口状の斜面がみられる。この帯曲輪の東側にも虎口状の斜面はある。曲輪の北東側は採土をまぬがれ、ここが空堀で区切られていたことが観察できる。また、南西側は浅い空堀と幅広の土塁、そしていつの頃からあるのか南西側の尾根とを区切る様に深い道が北西麓から曲輪の下の空堀を南～東へと通じている。この道は地区の古老の話しでは明治末年頃はまだ浅く、その後採土によって現在のように深くなったといい、あるいはこの土塁はさらに南西の尾根の盛土された曲輪状の平坦面へと続いていたのかもしれない。しかし、防御の面からは尾根筋を分断するかのように作られたこの道は理に適っていると思われるのであるが、前掲『日向地誌』にもそのような空堀があったという記述はみられない。この曲輪の南西尾根筋には、西～北西側に盛土による数段の平坦面が観察できる。また、この城の裾部は全て約1m程の崖になっているが、これが近年の土取りによるものかどうかは不明である。

発掘調査が進行するにつれて曲輪の東南部に虎口と思われる遺構が2ヵ所検出された。南に開口した方は外側空堀へと向かい、一方の東側へ開口した方は曲輪の東端近く、南北に掘られた深い空堀状の遺構へと通じていた。また、曲輪の北西側下段に見られた帯曲輪には曲輪沿いに南西側空堀へと続く深さ約2.5mの2段に掘り込まれた空堀が巡ることが判明した。その埋土にも曲輪上の遺構の埋土にも多くの炭化材片と焼土が混入している。そして、西側の空堀は現状より約2m前後深く、北西側に虎口状に開く部分は盛土をされているようであり、さらに南西側の幅広の土塁や北西側の帯曲輪には明らかな拡張の痕跡がみられた。特に

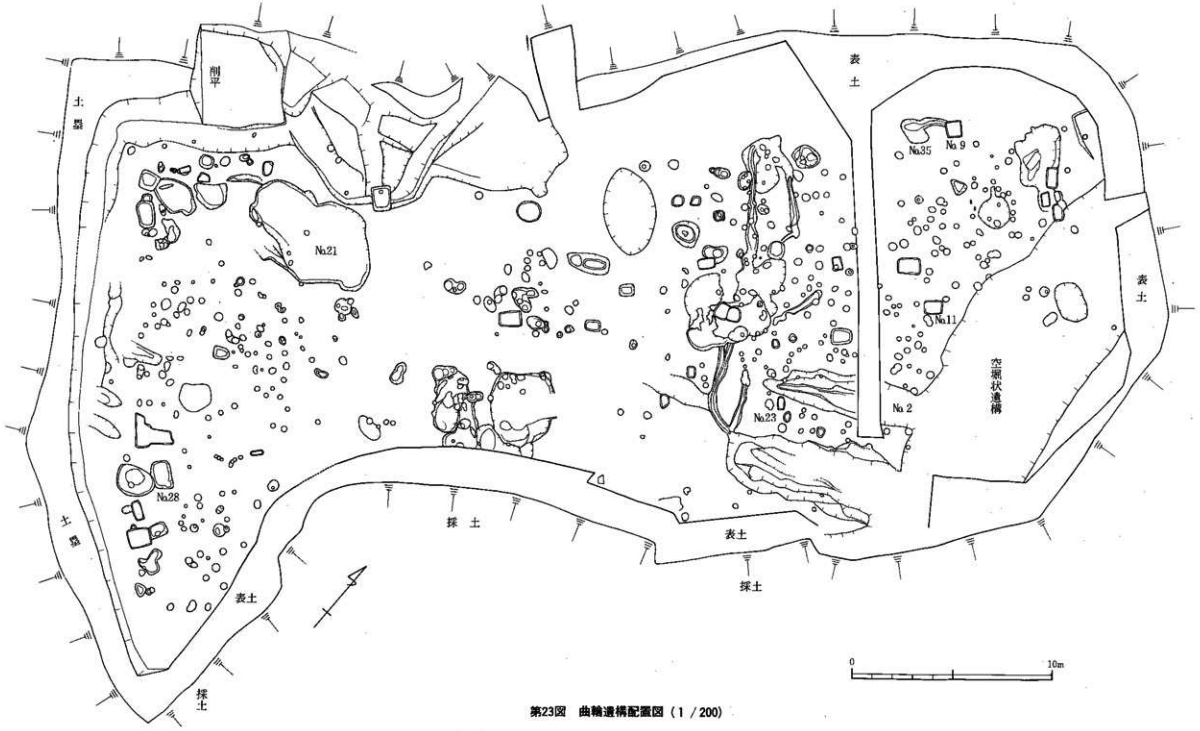
南西側の幅広の土塁の方は急拵えで拡張したかの様に盛土に締まりがなく、トレンチを入れると同時に土砂の崩壊が始まるといった有り様であった。その南西側の尾根の平坦面を形成している盛土も同様に締まりがなくもろさを感じさせるものであり、同時期に造られた可能性がある。曲輪の北東側下段は赤っぽい土砂による盛土により南側から次第に傾斜させてあった。また、南西～北西側を巡る空堀の埋土は明らかに人為的に埋められたものであり、空堀の北東端部には空堀に沿って流れてくる水を一時的に溜めておけるような方形プランの遺構が地山の砂岩に掘り込まれていた。しかし、これは南西側の堀と同じ埋土で埋まり、それに先の赤っぽい土砂による盛土斜面がなされていた。この空堀の埋土は北側の虎口状に開く箇所を境に南西側と北東側で土砂の質が異なり、先述のように南西側と東側端部は同じ埋土、北側は上の曲輪にみられる土砂や曲輪上の土塁にみられる土砂と同質と思われる土砂を用いているようである。このように、当車坂城（西ノ城）跡は数度の修改築が行われており、曲輪東端部にみられる堀状の遺構や帯曲輪の拡張の痕跡、さらに曲輪の土塁下から土師器小皿片等が出土することなどから、このうち幾度かはかなり大規模に改変されたものと考えられる。この改変が文献上のどの修築に該当するのかは今後の課題である。

（菅付和樹）

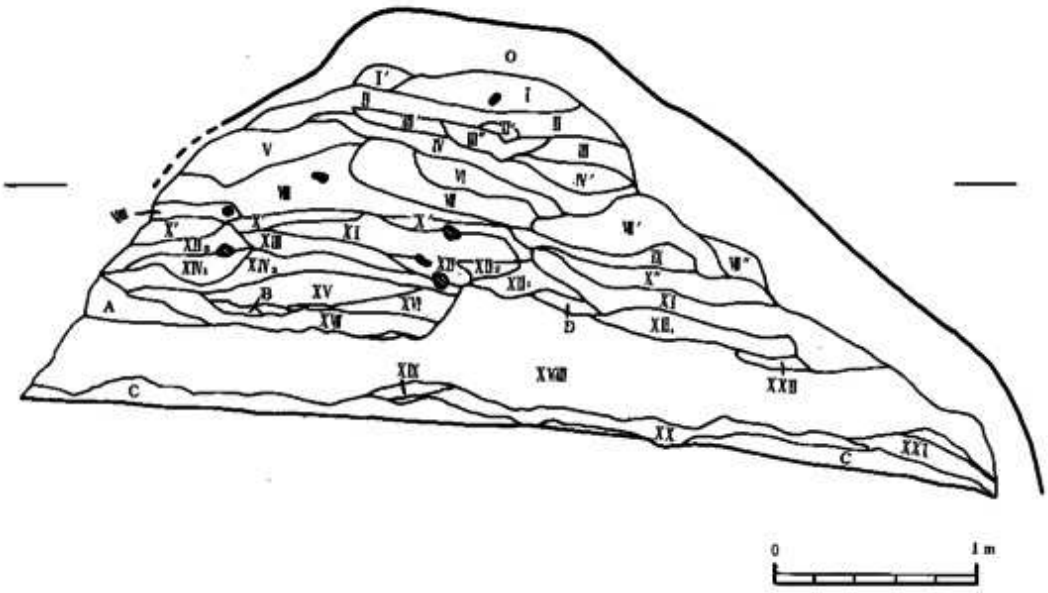
曲輪（第23図）

曲輪も採土によって南側の約５分の１を失っているが、その規模は推定で約55m ×35m と、2,000㎡程度の面積を有すると思われる。標高は約36m、平地との比高差は30m 程度ある。また、帯曲輪の標高は28～29m で曲輪との比高差は７～８m 程度である。

曲輪内の遺構としては、土塁、空堀、溝、土壙、柱穴などがある。土塁は前述のように西端に添って、Ｌ字状に築かれており幅約５m、高さ約２m の規模をもつ。土層断面（第24図）から黒色土の堆積が２度にわたってみられる点など土塁の増築、補強も考えられる。東端に掘られた空堀状遺構は幅約７m、深さ約2.5m のＶ字状を呈し、ほぼ南北方向に丘陵を切断する形で掘られている。また、埋土の状態からは一時期に埋められており、埋土上には遺構の掘り込みもみられる。土壙は円形、方形プランが主で、不定形プランの土壙や掘り込み状の遺構を含めると70基近く検出された。特に、方形プランの土壙は長辺１m、短辺0.7～0.8 m、深さ0.5～1.5m 規模の長方形のものが中心で、なかには１辺１m 前後の正方形プランの土壙もみられる。方形プランのものは、いずれも礫層まででていねいに掘り込んである。埋土中に炭化物、炭化材を含むものや、拳大～人頭大の川原石を入れ込んだものなどがみられる。柱穴は約200本を数えるが詳細は今後の検討による。



第23図　曲輪遺構配置図（1／200）



Ⅰ. 7.5YR3/4、明褐色、小礫（径2cm以下）少量、黒褐色土ブロック（径1.5cm以下）少量、炭化物粒（径3mm以下）比較的多、きめ細かく、弱粘性、軟。

Ⅰ′ Ⅰに炭化物粒を多量に混、きめ細かく、強粘性、7.5YR3/4、褐色、軟。

Ⅱ. 7.5YR3/4、にぶい橙、小礫（径3cm以下、径5～1cmが最多）やや多、粒子～ブロック状の黒褐色土、やや少、炭化物粒～炭化材片（径5mm以下）やや多、橙色土粒（アカホヤ？）微少、きめ細く、弱粘性、やや軟。

Ⅱ′ Ⅱに、さらに炭化材片（径1.2cm以下）、黒褐色土を混、7.5YR3/4、にぶい橙。

Ⅲ. 7.5YR3/4、褐色、にぶい橙色（7.5YR5/6）土と黒褐色（7.5YR3/4）土が粒状～ブロック状（径1.5cm以下）が混合、ムラがある。炭化物粒、橙色粒（径3mm以下）少量含、きめはやや細かく、粘性極弱、やや軟、小礫（径1cm以下）少量含。

Ⅲ′ Ⅲより、礫が大（径3.5cm以下）、黒褐色土ブロック大（径2.5cm前後）、もっと軟。

Ⅲ″ Ⅲより、黒褐色土の割合多、炭化物も多、黒っぽい、10YR3/4黒褐色。

Ⅳ. 10YR5/4、黄橙色、礫（径3.5cm以下、径2～3cm最多、Ⅰ～Ⅲの礫と異なり、粘土塊様の礫、岩盤起源？）凸色粒、炭化物粒、黒褐色土、各々少量混、アカホヤブロック（径2.5cm）あり、硬さは部分的に違う、やや軟～やや硬、シルト質土で粗砂（～径2mm）を含む。

Ⅳ′ Ⅳに Ⅲが混、ムラあり、10YR5/4。

Ⅴ. 黒色土（7.5YR1.7/1）ブロック（径2cm以下）、明黄褐色土（10YR6/6）、ブロック（径12cm以下）、両者の混合した、暗褐色土（10YR4/4）が混在、明黄褐色土には小礫（径4cm以下）混、焼土と炭化物粒を含む。粘性弱。黒色土は比較的きめが細かいが、明黄褐色土はシルト質。

Ⅵ. Ⅴと同じ構成、各ブロックは小さい（径2.5cm以下）、黒色土の割合がⅤより少なく、混合した、にぶい黄褐色土（10YR5/4）が多い。わずかだが、黄橙色砂質土（10YR6/6アカホヤからの小ブロック径1cm未満）もみられる。やや軟～やや硬、（ムラあり）

Ⅵ′ Ⅴ～Ⅵと同じ黒色土に、明黄褐色土粒～ブロック（径1cm未満）少量、Ⅴ、Ⅵの暗褐色土、にぶい黄褐色土を少量混、きめ細かく、弱粘性、小礫（径2cm以下）少量混、（10YR5/4）

Ⅵ″ Ⅵとほぼ同質だが、明黄褐色土は混じない。その他の混入物はⅥより若干多く、ムラがあまりない。色も明るく、10YR5/4、黒褐色、きめは比較的細かく、硬くしまっている。

Ⅶ* Ⅵより黒色土の割合多、10YR5/4より黒っぽい、礫も径1cm未満と小さく、少ない。軟。

Ⅶ. Ⅴの暗褐色土と同質、10YR5/4、黒色土と明黄褐色土が、ほぼ均一に混合。Ⅵにみられるものと同じ黄橙色砂質土（アカホヤか）ブロック（径1cm以下）を少量混、小礫（径7cm以下）～細礫（径2～3mm）少量混。きめ細かく、粘性やや強、硬、下半部ではやや黒っぽい。

Ⅶ′ Ⅶより、黒色土の割合多、黒っぽい、10YR3/4、黒褐色。

Ⅸ. Ⅶ′とにぶい黄橙色土、10YR5/4が混合、ムラあり。全体の色は10YR5/4、にぶい黄褐色。黄橙色土粒（10YR5/6）～ブロック（径1.5cm）が、少量混、この土はこれより下の層（Ⅹ″）に含まれる礫の破砕されたものと思われる。ややシルト質、硬。

Ⅹ. 黄褐色土（10YR5/6、やや砂質）、小礫（径4cm以下）が混合、上部では、Ⅶ′の小ブロック（径1.5cm未満）が混、やや軟。

Ⅹ′ 基本的にはⅩに同じ、Ⅶ′でなくⅨのブロックが多く混、やや軟。

Ⅹ″ 基本的にはⅩに同じ、Ⅶ′でなくⅨのブロック（径2cm未満）が上半部に混、やや硬。

Ⅹ‴ Ⅹ″に黒色土粒を全体に混、10YR5/6、にぶい黄褐色、非常に軟、しまりなし。

※ⅩⅠ以下は、多量の礫からなる非常に硬い層、ここでの礫は、粘土を圧縮したような硬い塊がほとんどで、中には砂～シルトを挟めたようなものもある（風化した石か）。粘土質の礫は、灰白色（2.5Y7/1）～橙色（5YR6/6）、表面に酸化鉄の被膜（黄～赤色）をつくっている。砂～シルト質の礫は、灰白～黄～橙色、これらは地山の基盤のもので、人為的に砕いたものもあろう。丸味のある礫は非常に少ない。このような礫は、Ⅳ層、Ⅸ層、Ⅹ、Ⅹ′～Ⅹ‴層にも含まれる。以下の注記では、一部の層を除き、ほとんどが同様の礫層なので、各層の特徴として、礫間の土（礫の粉化したものも混じっているだろう）と礫の大きさについて記すに留める。

ⅩⅠ. 7.5YR5/6、橙色の上混、粘～シルト質、径7cm以下の礫、径2cm以下の細礫多、黒色土ブロック（径1～2cm）少量混。

ⅩⅡ. 1 10YR5/6、にぶい黄橙色の上混、シルト～砂質、黒～黒褐色土粒～ブロック（径7cm以下）混、径6cm未満の礫、礫の割合やや少。
2 ⅩⅠ2と同じ土を混、しかし、礫は径4～8cmのものが混、土の割合少、黒色土は径5mm以下の粒状で混。
3 ⅩⅠ2と同じ土、礫は少ない、径3cm以下、黒色土は径1.5cm程度のブロック状で少量混、軟。

ⅩⅢ. 10YR5/6、黄褐色のシルト～砂質土、黒色土が径8mm以下の粒状で少量混、ⅩⅠ2との境界には黒色土が帯状になっている。幅1cm未満、礫は径5cm以下、径2cm前後最多。

ⅩⅣ. 1 5YR5/6、橙色のシルト質土、礫は径10cm以下、径5cmを超えるものは、散的に少、わずかに黒色土が粒状（径2mm以下）で混。
2 ⅩⅠ6とほぼ同じ、ただ黒色土は径2cm未満のブロック状で混。礫は径2cm前後最多。

ⅩⅤ. 7.5YR5/6、橙色（色赤より暗い）のシルト質土、礫は径6cm以下。径3～4cmのものが最多、黒色土が径6mm以下の粒状で少量混。

ⅩⅥ. 10YR5/6明黄褐色砂質土、礫は径5cm以下、礫の割合多、径2～3cm最多、黒色土が径3mm以下の粒状で少量混。

ⅩⅦ. 10YR5/6、黄褐色砂質土、礫は径13cm以下で4～10cmのものが最多、全体に礫がぎっしりつまり、土は少ない。黒色土が粒状で少量混。

ⅩⅧ. 7.5YR5/6、黄橙色シルト質土、礫は径15cm以下、径8cmを超す大きなものが点在するが、その他は径2cm以下のものが最多で、全体につまっている。

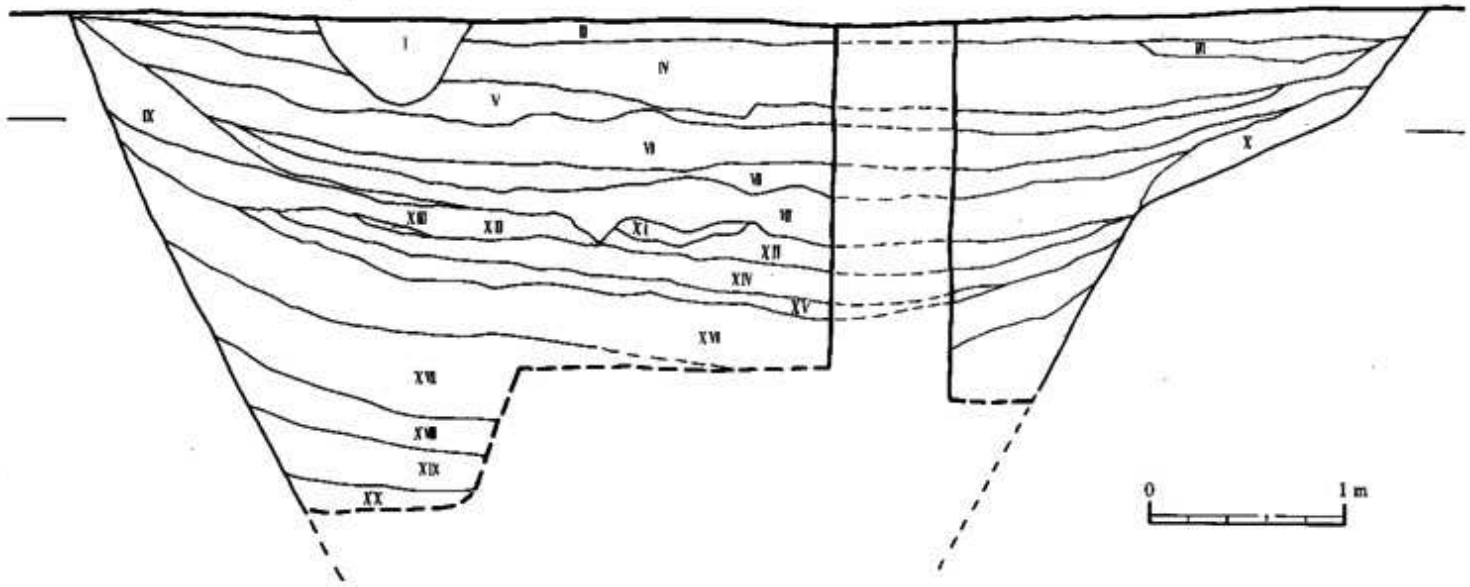
ⅩⅨ. 10YR5/6、明黄褐色、シルト質土（弱粘性）、7.5YR5/6、黒色土（弱粘性、こめっぽい、きめ細か）、この2つの混じった、7.5YR5/6に黒褐色土が混在、］ムラがある。黒色土は粒状～径1cm未満のブロック状で混、径1.5cm以下の小礫少量混、径1cm未満が主、丸味のある礫。

ⅩⅩ. 10YR5/6、黄橙色砂質土、弱粘性、礫は径3cm以下と小さく量も比較的少ない。黒色土粒をわずかに混。

ⅩⅩⅠ. 10YR5/6、にぶい黄橙色砂質土、礫は径5cm以下、比較的少い。黒色土が径3cm以下のブロック～粒状で混、若干多め。

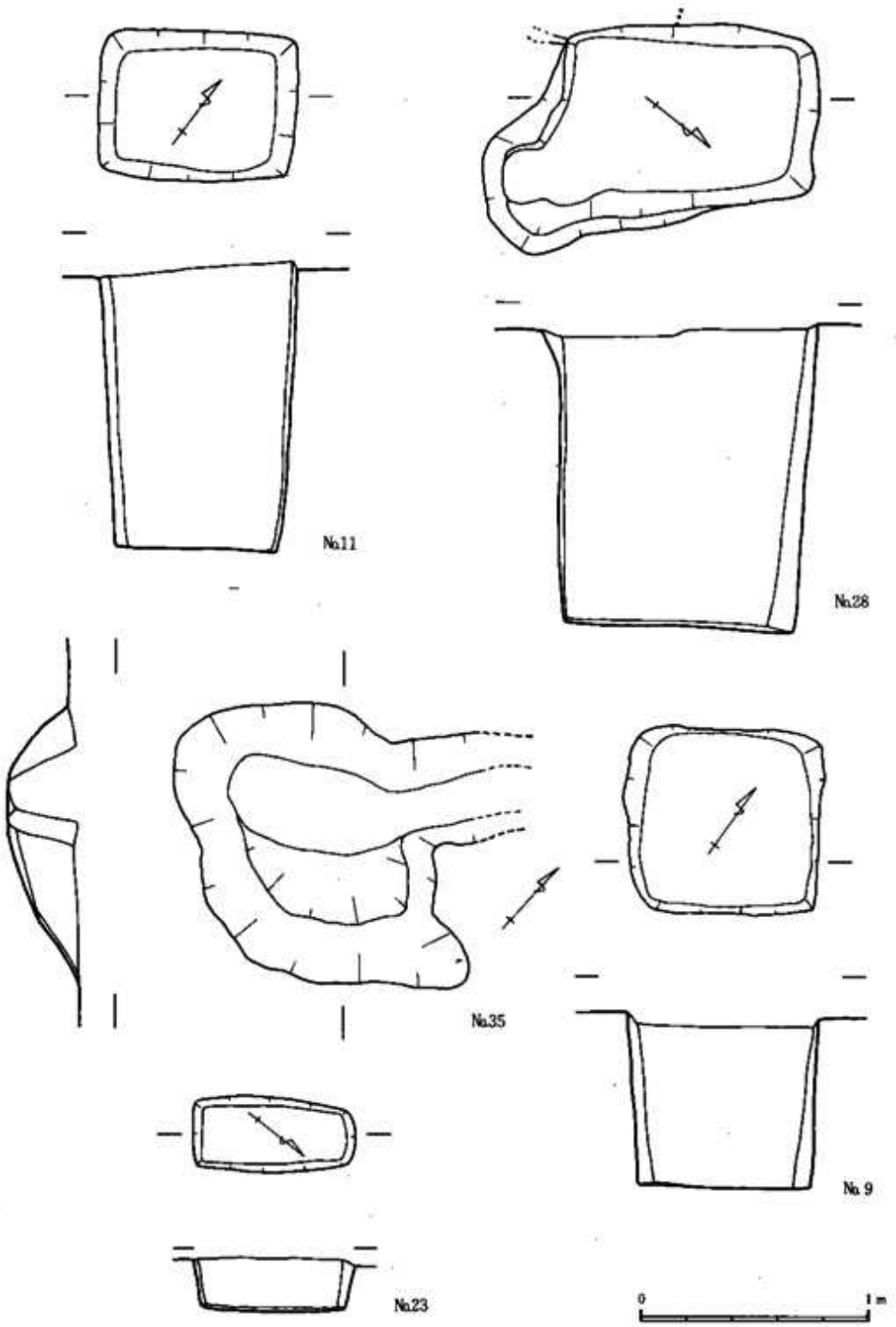
ⅩⅩⅡ. 10YR5/6、明黄褐色シルト質土、礫は径2cm以下で比較的少。

第24図　曲輪土塁土層断面図（1／40）

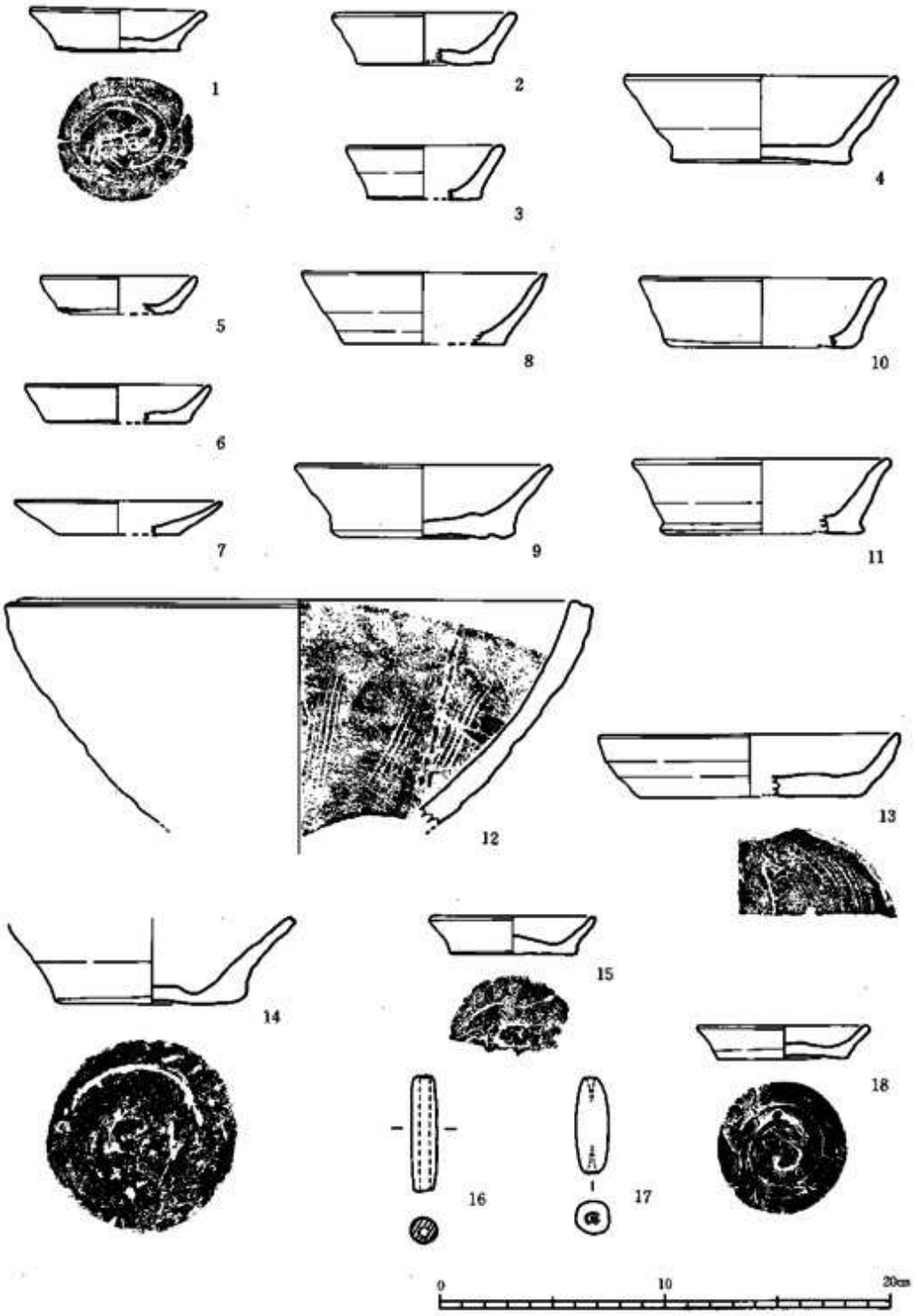


Ⅰ. 暗褐色(7.5YR3/4)土に明黄褐色(10YR5/6)ブロック混入。
Ⅱ. 明黄褐色(10YR5/6)ブロックと明青灰色(5B3/1)ブロック混合。
Ⅲ. 黒褐色(5YR3/1)土に明黄褐色(10YR5/6)ブロック混入。
Ⅳ. Ⅱ層より明青灰色(5B3/1)ブロックの粒質がこまかい。
Ⅴ. 青灰色(5B3/1)の小粒ブロック層。橙色(5YR6/6)土混入。
Ⅵ. 青灰色(5B3/1)の大粒ブロック層。黄褐色(10YR5/6)土混入。
Ⅶ. 青灰色(5B3/1)の小粒ブロック層。橙色(5YR6/6)土混入。
Ⅷ. 明青灰色(5B3/1)の大粒ブロック層。黄褐色(10YR5/6)土混入。
Ⅸ. 橙色(5YR6/6)ブロック層。黒褐色(5YR3/1)土、褐色(10YR4/4)土を含む。
Ⅹ. 橙色(5YR6/6)ブロック層。
ⅩⅠ. 橙色(5YR6/6)ブロック層。暗褐色(7.5YR3/4)土を含む。
ⅩⅡ. 明青灰色(5B3/1)の大粒ブロック層。
ⅩⅢ. 橙色(5YR6/6)ブロック層。
ⅩⅣ. 明青灰色(5B3/1)の小粒ブロック層。黄褐色(10YR5/6)土を含む。
ⅩⅤ. 明青灰色(5B3/1)の小粒ブロック層。暗褐色(7.5YR3/4)土を含む。
ⅩⅥ. 明青灰色(5B3/1)の大粒ブロック層。
ⅩⅦ. 明青灰色(5B3/1)の小粒ブロック層。黄褐色(10YR5/6)土を含む。
ⅩⅧ. 明青灰色(5B3/1)の小粒ブロック層。暗褐色(7.5YR3/4)土を含む。
ⅩⅨ. 明青灰色(5B3/1)の大粒ブロック層。
ⅩⅩ. 明青灰色(5B3/1)の小粒ブロック層。

第25図　曲輪空堀土層断面図（1／40）



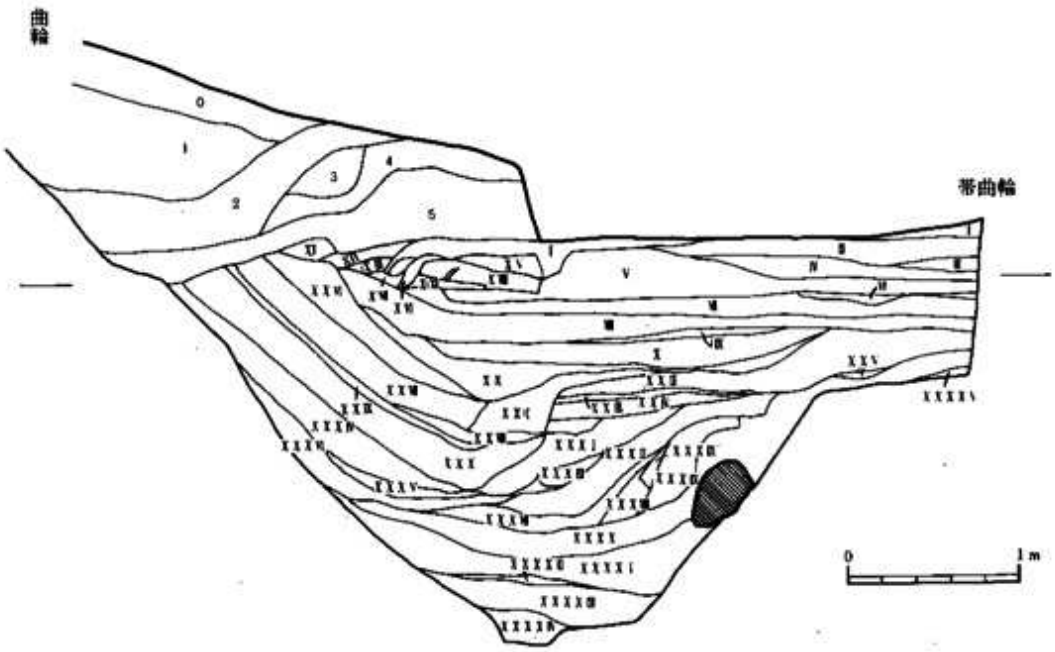
第26図　曲輪遺構実測図（1 / 30）



第27図　車坂城跡出土遺物実測図・拓影　1～3…№9、4…№11、5～11…№28
12～13…№35、14…№23、15～17…№21、18…№2

表9　車坂城跡出土遺物観察表

図面番号	遺物番号	遺構番号	器種	法量 (cm)			色調		胎土	焼成	調整			備考
				口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	底部	
第27図	1	No.9	小皿	7.6	5.5	1.9	浅黄橙	浅黄橙	精良、細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	2	〃	〃	推定 8.0	推定 6.0	2.3	淡橙	淡橙	精良、細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	3	〃	〃	推定 6.8	推定 5.0	2.4	浅黄橙	浅黄橙	精良、細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	4	No.11	坏	11.9	7.6	3.8	にぶい橙	にぶい橙	精良、細砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
〃	5	No.28	小皿	推定 6.6	推定 4.0	1.7	にぶい橙	にぶい橙	精良、細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	6	〃	〃	推定 8.1	推定 6.0	1.7	にぶい橙	にぶい橙	精良、細砂粒を含む	良好	ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	7	〃	〃	推定 9.0	推定 5.3	1.5	浅黄橙	浅黄橙	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	8	〃	坏	推定 10.8	推定 7.1	3.2	にぶい橙	にぶい橙	精良、細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	9	〃	〃	推定 11.1	推定 7.8	3.2	浅黄橙	浅黄橙	精良、細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	10	〃	〃	推定 10.7	推定 7.9	3.1	淡黄	淡黄	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	11	〃	〃	推定 11.1	推定 8.5	3.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	12	No.35	擂鉢	推定 24.9			浅黄橙	浅黄橙	茶色の細砂粒と0.5～1cmの砂粒を含む	やや不良	口縁部 横ナデ 胴部 ナデ	口縁部 横ナデ 胴部 ナデ		須恵質
〃	13	〃	小皿	推定 13.1	推定 9.6	2.7	浅黄橙	浅黄橙	精良、細砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	14	No.23	坏	——	7.4	——	にぶい橙	にぶい橙	精良、細砂粒を含む	やや良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	
〃	15	No.21	小皿	7.2	5.5	1.7	にぶい橙	にぶい橙	精良、細砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	ヘラ切り	
〃	16	〃	土錘					灰白	精良	やや不良				最大径 1.5cm 長さ 4.2cm
〃	17	〃	〃					灰白	精良	やや不良				中央部貫孔径不明 最大径 1.1cm 長さ 5.2cm
〃	18	No.2	小皿	7.4	5.7	1.5	浅黄橙	浅黄橙	精良	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	



0．表土（腐食土）
1．にぶい黄褐色（10YR5/4）土に、4～5cm大～拳大の礫、明黄褐色（10YR5/6）ブロック混入。
2．青灰色（5B5/1）ブロック、橙色（5YR5/8）ブロック混合層。
3．黒褐色（10YR3/2）土層、4～5cm大～拳大の礫混入。
4．暗褐色（10YR3/4）土層に明黄褐色（10YR5/6）土ブロック混入。
5．暗褐色（10YR3/4）～にぶい黄褐色（10YR5/4）土層に明黄褐色（10YR5/6）土粒少し含む。

Ⅰ．明黄褐色（10YR5/6）土ブロックの堆積
Ⅱ．褐色（10YR4/4）土ブロックを中心に暗褐色（10YR3/3）、黒褐色（10YR3/2）、明黄褐色（10YR5/6）の色ブロックが堆積。黒褐色土粒が混入しており黒味を帯びる。
Ⅲ．明黄褐色（10YR5/6）土ブロック堆積。褐色（10YR4/4）土粒が混入している。
Ⅳ．暗褐色（10YR3/4）土ブロック堆積。明黄褐（10YR5/6）土ブロックも少し混入。
Ⅴ．Ⅱ層に類似。黒褐色（10YR3/2）土ブロックの混入の割合が多い。
Ⅵ．暗褐色（10YR3/4）土ブロック堆積。明黄褐色（10YR5/6）土ブロックはほとんど混入せず。
Ⅶ．Ⅵ層より明黄褐色（10YR5/6）土ブロックの混入の割合が多い。
Ⅷ．にぶい赤褐色（5YR5/4）土。橙色（5YR6/8）土粒がわずかに混入する。
Ⅸ．にぶい赤褐色土。橙色土粒が少し混入する。
Ⅹ．にぶい赤褐色土。橙色土粒が多く混入する。黒褐色（10YR3/2）土粒を少し含む。
ⅩⅠ．Ⅴ層に黒褐色（10YR3/2）土を少し含む。
ⅩⅡ．Ⅴ層に明黄色（10YR6/6）土ブロックを多く含む。
ⅩⅢ．ⅩⅠ層と類似層。
ⅩⅣ．Ⅰ層に暗褐色（10YR3/4）土粒を多く含む。
ⅩⅤ．暗褐色（10YR3/4）土ブロックの堆積。明黄褐色（10YR5/6）土ブロック、黒褐色（10YR3/2）土、褐色（10YR4/4）土粒を含む。
ⅩⅥ．ⅩⅠ層と類似層
ⅩⅦ．暗褐色（10YR3/4）土に橙色（5YR6/8）土、明黄褐色（10YR5/6）土混入。
ⅩⅧ．黒色（10YR2/1）土。
ⅩⅨ．Ⅴ層より黒色味を帯びる。
ⅩⅩ．橙色（5YR6/8）土に黒褐色（10YR3/2）土を多少含む。
ⅩⅩⅠ．礫層（4～5cm大～拳大の川原石）。
ⅩⅩⅡ．暗褐色（10YR3/4）土層、橙色（5YR6/8）土、にぶい黄色（2.5Y6/4）土粒を少し含む。
ⅩⅩⅢ．橙色（5YR6/8）土層に、暗褐色（10YR3/4）土混入。
ⅩⅩⅣ．にぶい黄褐色（10YR5/4）土層に明黄褐色（10YR5/6）土混入。
ⅩⅩⅤ．ⅩⅩⅢ層と類似層
ⅩⅩⅥ．橙色（5YR6/8）土層に、暗褐色（10YR3/4）土、黒褐色（10YR3/2）土を多く含む。
ⅩⅩⅦ．橙色（5YR6/8）土、暗褐色（10YR3/4）土、黒褐色（10YR5/2）土混入層。
ⅩⅩⅧ．橙色（5YR6/8）土ブロックを多く含み、暗褐色（10YR3/4）、黒褐色（10YR3/2）土、2～3cm大の小礫を少し含む。
ⅩⅩⅨ．暗褐色（10YR3/4）土層。黒褐色（10YR3/2）土、橙色（5YR6/8）土を少し含む。
ⅩⅩⅩ．橙色（5YR6/8）土層、暗褐色（10YR3/4）土、黒褐色（10YR5/2）土をわずかに含む。
ⅩⅩⅩⅠ．礫層（4～5cm大～拳大の川原石）
ⅩⅩⅩⅡ．橙色（5YR6/8）土ブロック層に暗褐色（10YR3/4）土を含む。
ⅩⅩⅩⅢ．橙色（5YR6/8）土と暗褐色（10YR3/4）土の混合。
ⅩⅩⅩⅣ．ⅩⅩⅩ層に黒褐色（10YR3/2）土混入。
ⅩⅩⅩⅤ．暗褐色（10YR3/4）土層に黒褐色（10YR3/2）土を多く含む。
ⅩⅩⅩⅥ．黒褐色（10YR3/2）土層。
ⅩⅩⅩⅦ．暗褐色（10YR3/4）土層、明黄褐色（10YR5/6）土ブロック混入。
ⅩⅩⅩⅧ．暗褐色（10YR3/4）土層。橙色（5YR6/8）土と黒褐色（10YR3/2）土を混入。
ⅩⅩⅩⅨ．暗褐色（10YR3/4）土層。橙色（5YR6/8）土を含む。
ⅩⅩⅩⅩ．橙色（5YR6/8）土層。
ⅩⅩⅩⅩⅠ．ⅩⅩⅩⅨ層に暗褐色（10YR3/4）土を少し含む。
ⅩⅩⅩⅩⅡ．暗褐色（10YR3/4）土に4～5cm大の礫と明黄褐色（10YR5/6）土ブロックを混入。
ⅩⅩⅩⅩⅢ．黒褐色（10YR3/2）土に暗褐色（10YR3/4）土、明黄褐色（10YR5/6）土を含む。
ⅩⅩⅩⅩⅣ．明黄褐色（10YR6/6）土。
ⅩⅩⅩⅩⅤ．青灰色（5B5/1）土ブロックに黄褐色（10YR5/6）土混入。
ⅩⅩⅩⅩⅥ．青灰色（5B5/1）土。

第28図　帯曲輪空堀土層断面図（1／40）

出土遺物は、量的には多くないが、柱穴、土壙、掘り込み、溝などの遺構を中心にみられる。量的にはヘラ切り底の土師皿の割合が多い。陶磁器では備前、常滑、肥前系のものが少量だがみられる。また、輸入陶磁器としては、青磁の割合が多く、白磁や天目皿などもみられる。その他の遺物では、土錘、古銭、鉄片などがある。

Ⅲ、ま と め

今回の調査において、曲輪東端で検出された幅７ｍの空堀は、明らかに最終的な円柱状の城形に成形される以前に丘陵を切断するために造られた空堀と思われる。さらに、その後に堀を埋めて曲輪の一部として使用している。また、土塁の土層堆積の状況から土塁の補強、あるいは増築が考えられる点など、この城跡は何度か手を加えられていることが今回の調査で解明できた。このことは、「日向記」などの文献にも改築の事実が記載されており、注目したい。

また、出土遺物から見ると、ヘラ切底を主体とする土師皿や、14世紀後半から15世紀前半にかけての青磁、白磁などの輸入陶磁器が量的に多く出土していることや、備前系の擂鉢、滑石製の石鍋など日常的な遺物の破片もみられることなどから、14世紀後半から15世紀前半にかけての時期を中心に、城内での生活もある程度考えられる。しかしその後、16世紀中頃にかけての戦乱の状況下においては遺物もあまり見られず出城的な役割の城であった可能性も今回の調査からうかがわれる。

（永友良典）

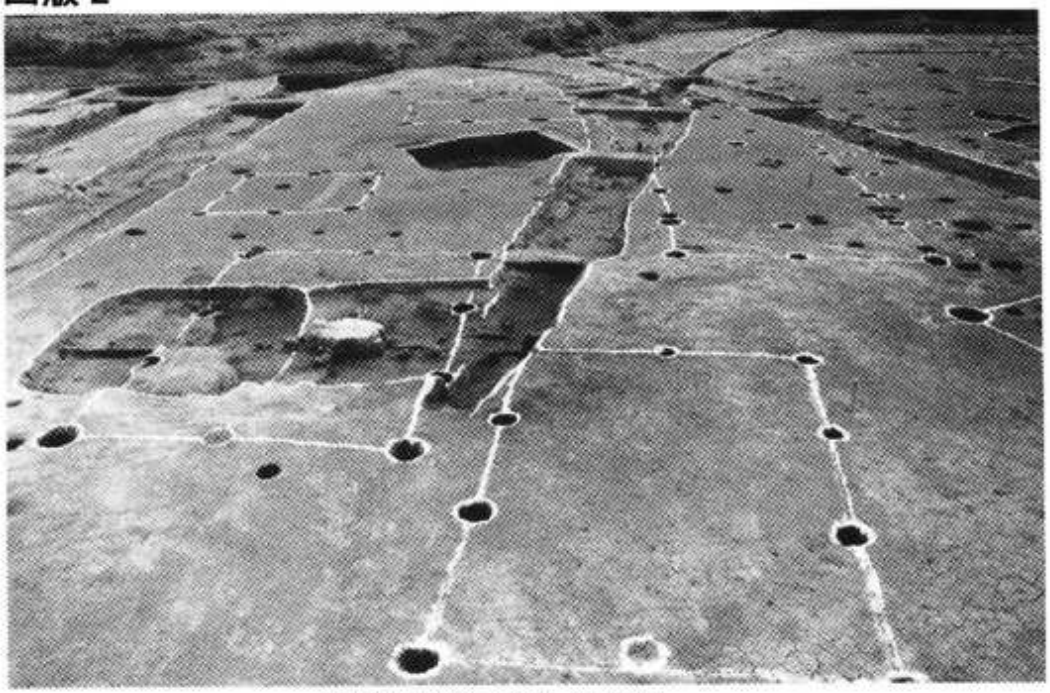
図　　版

図版 1

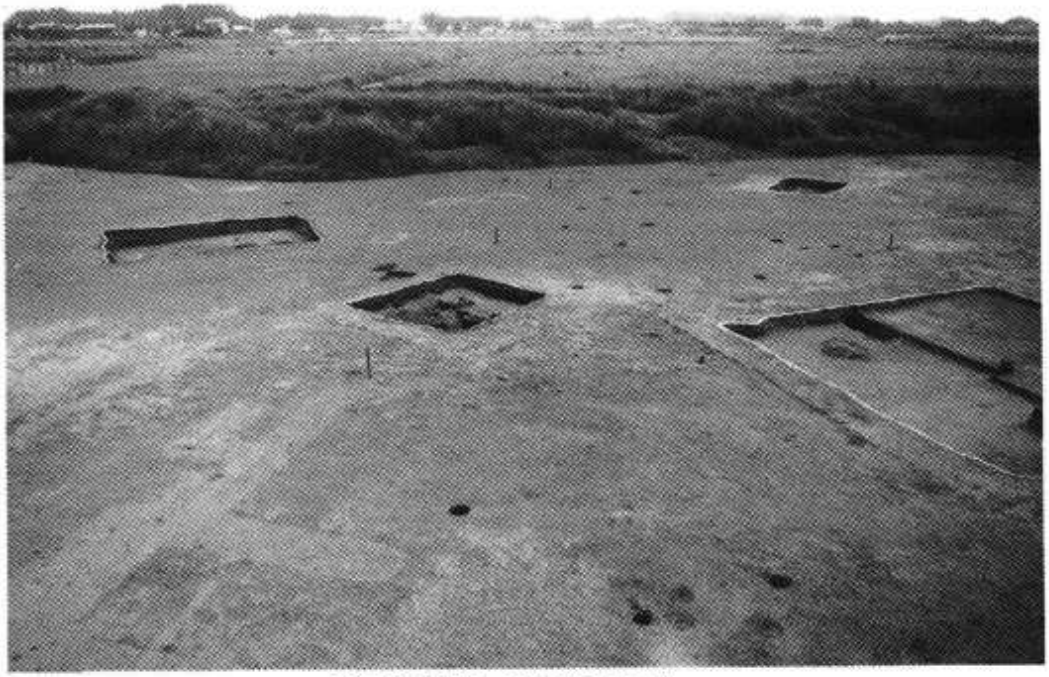
陣ノ内遺跡遠景（南・車坂城跡上より）

遺構分布状況・東区（東から）

図版 2

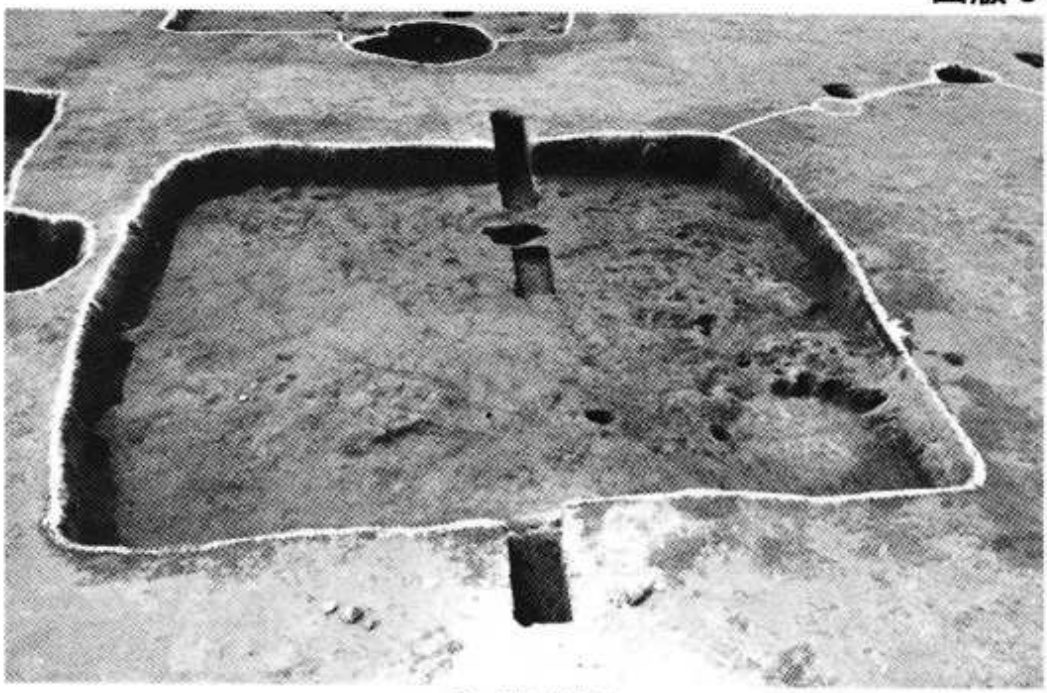


遺構分布状況・中央（北から）

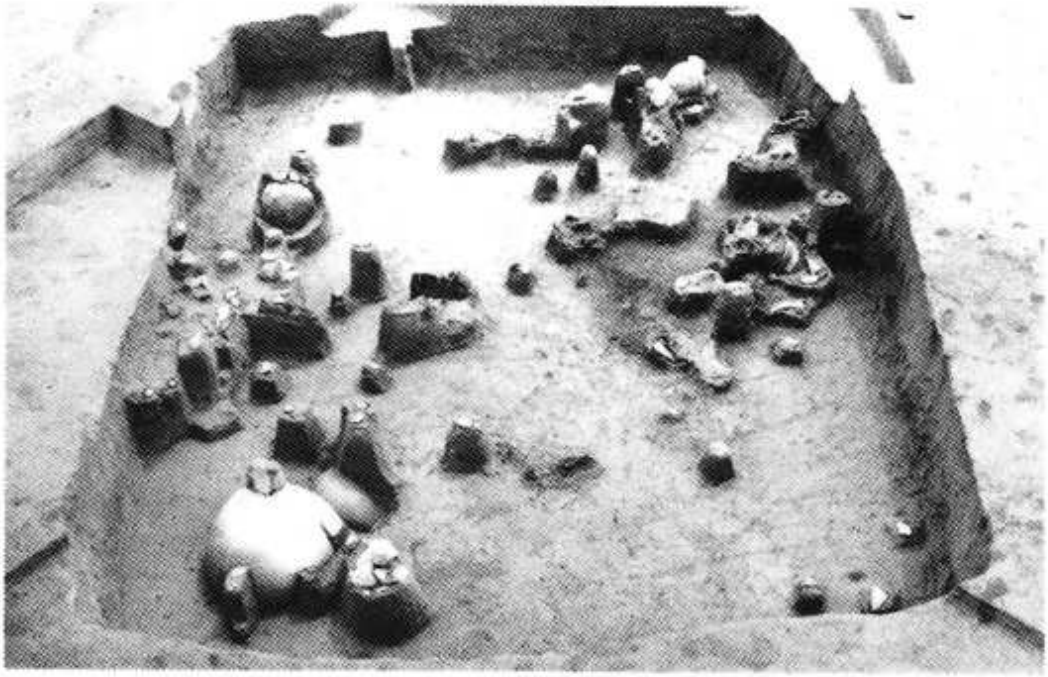


遺構分布状況・西区（南から）

図版 3



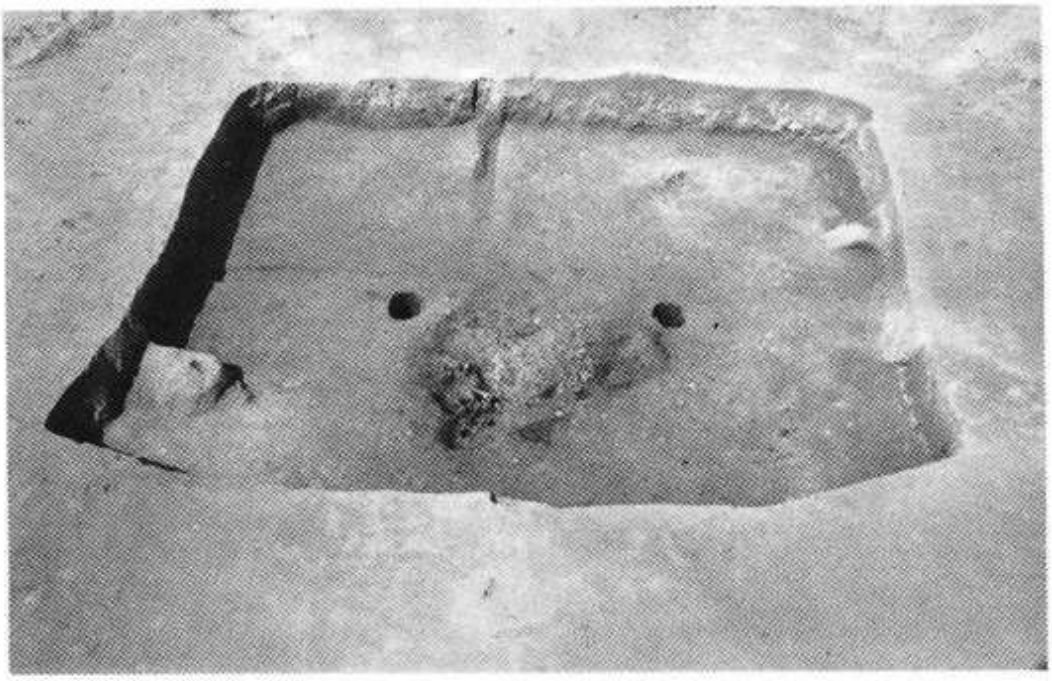
SA 4 検出状況



SA 9 検出状況

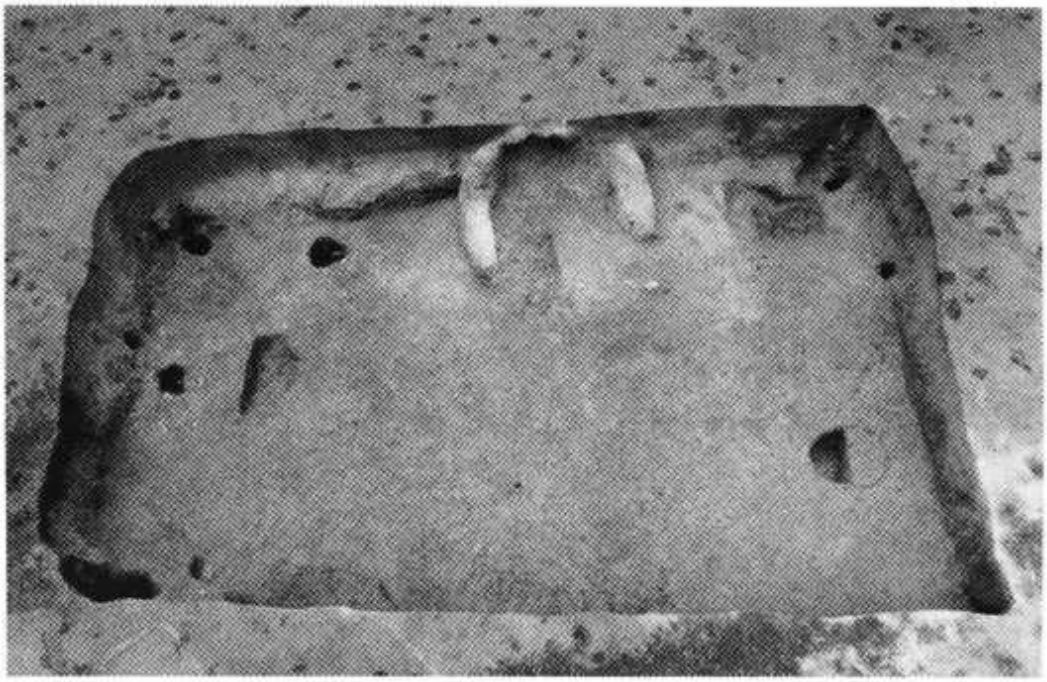
図版 4

SA18検出状況

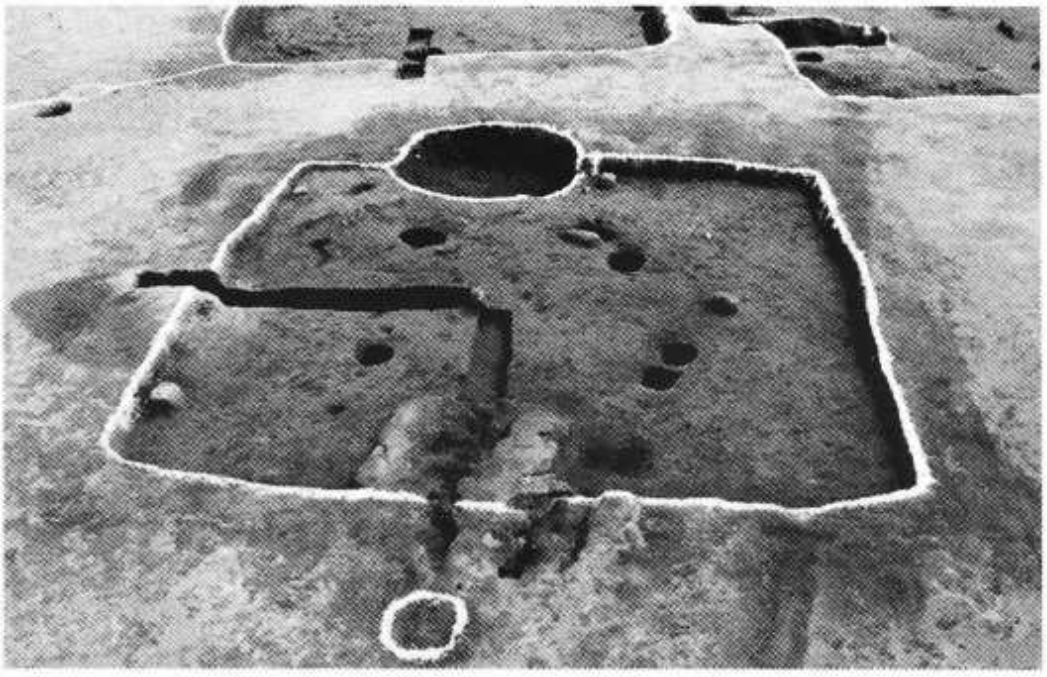


SA19検出状況

図版 5

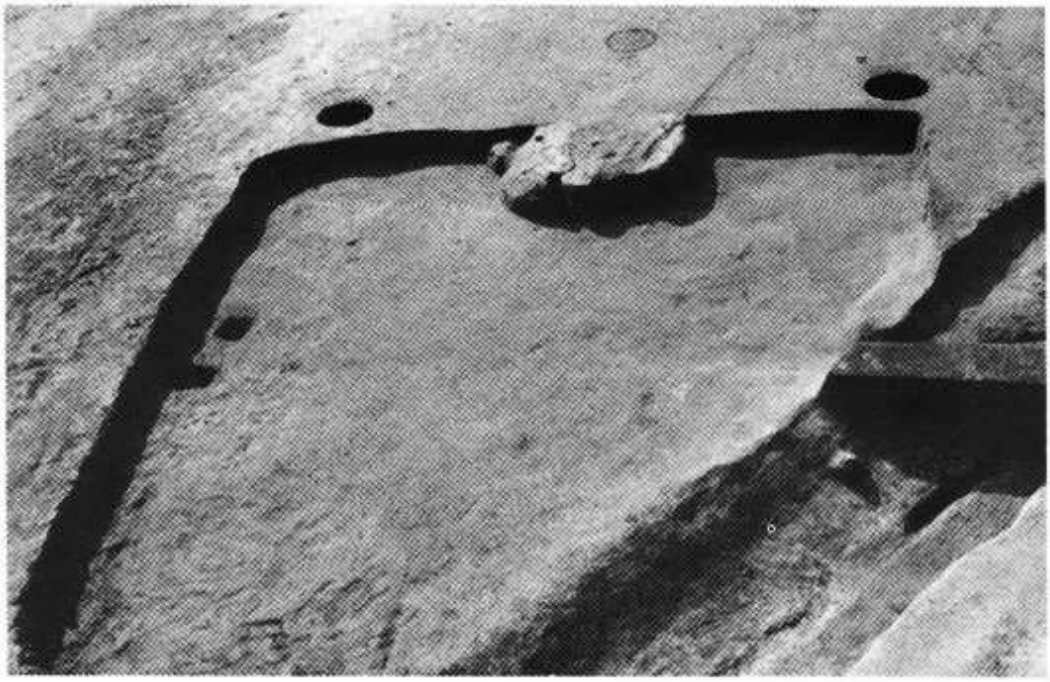


SA20検出状況

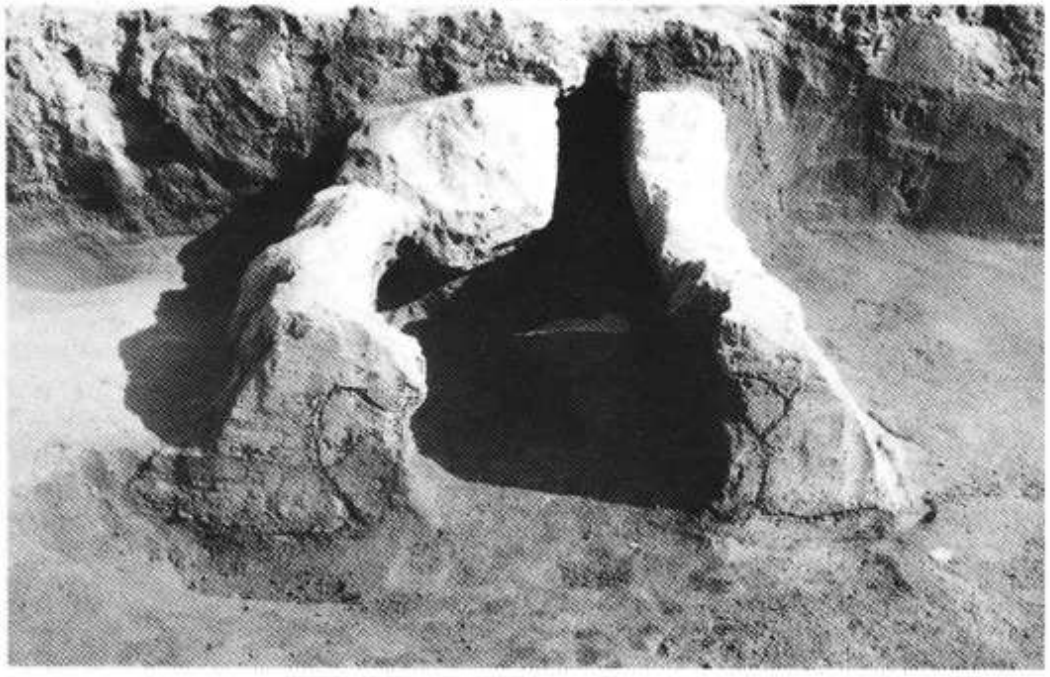


SA 3 検出状況

図版 6



SA７検出状況



SA13カマド検出状況

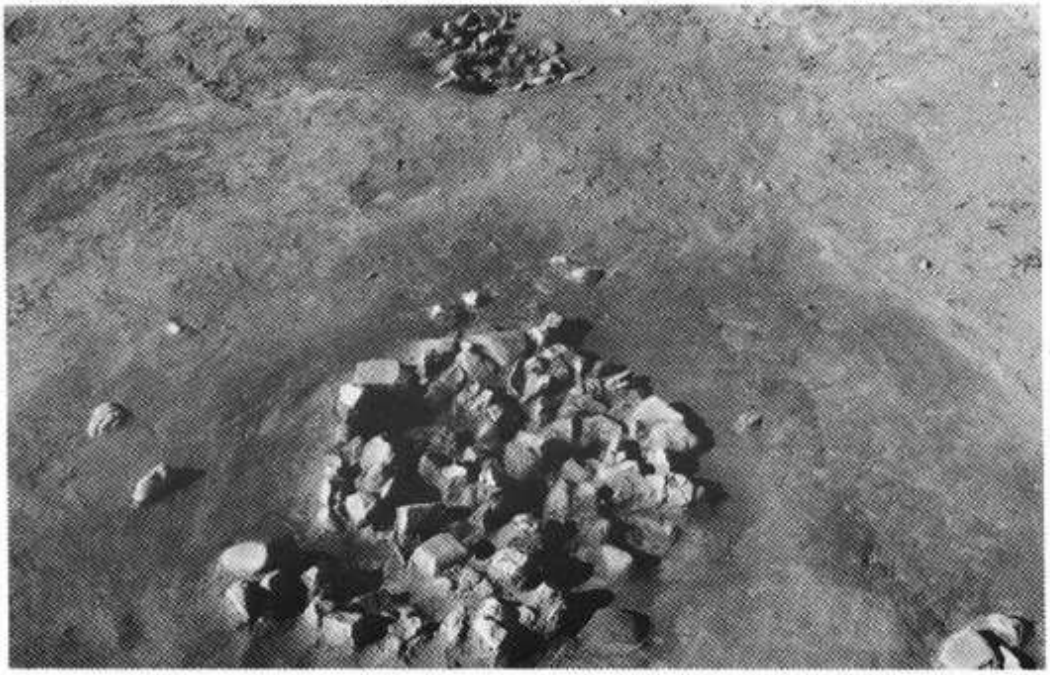
図版 7

SC 4 検出状況

SC 4 古銭出土状況

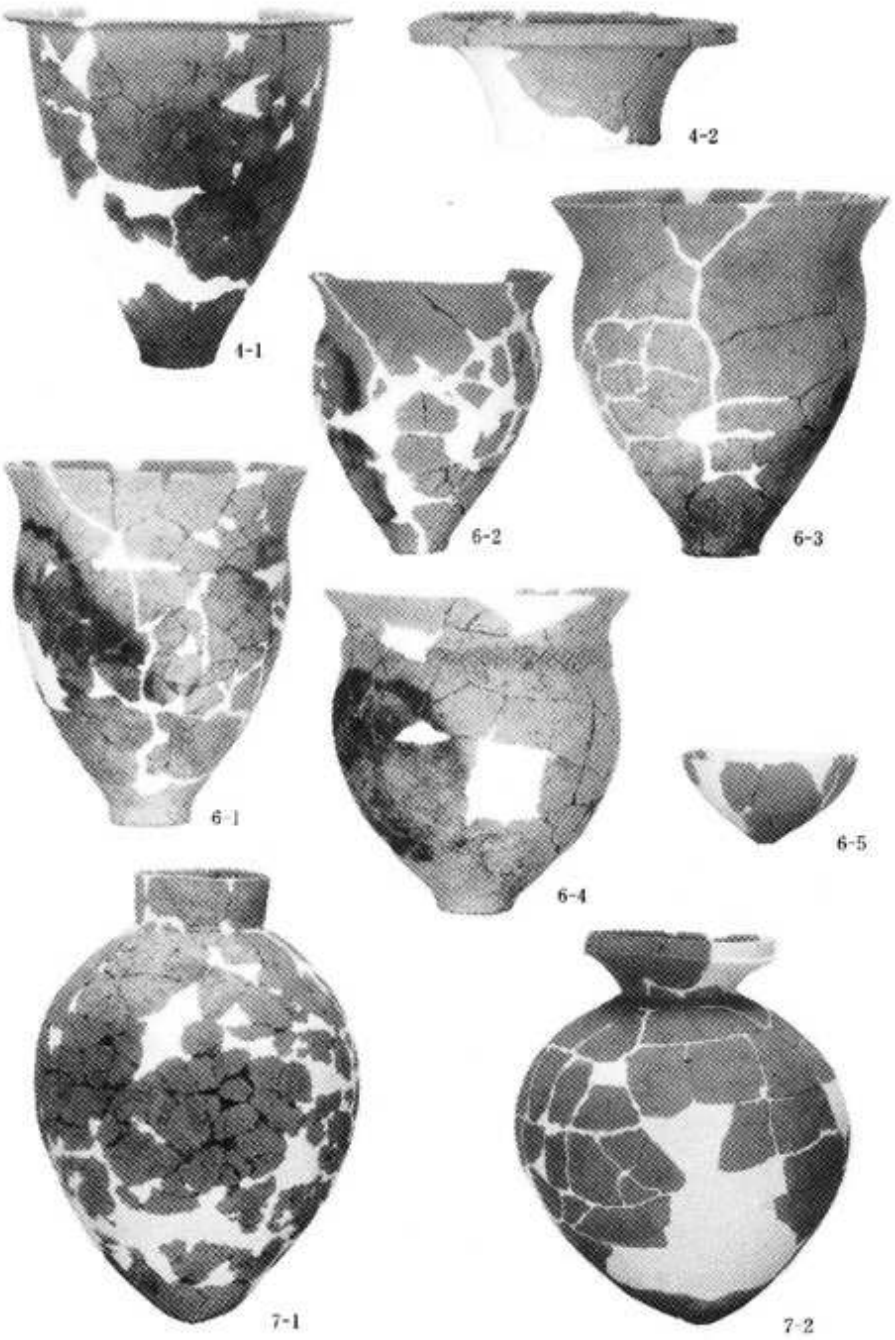
図版 8

SE 5 検出状況



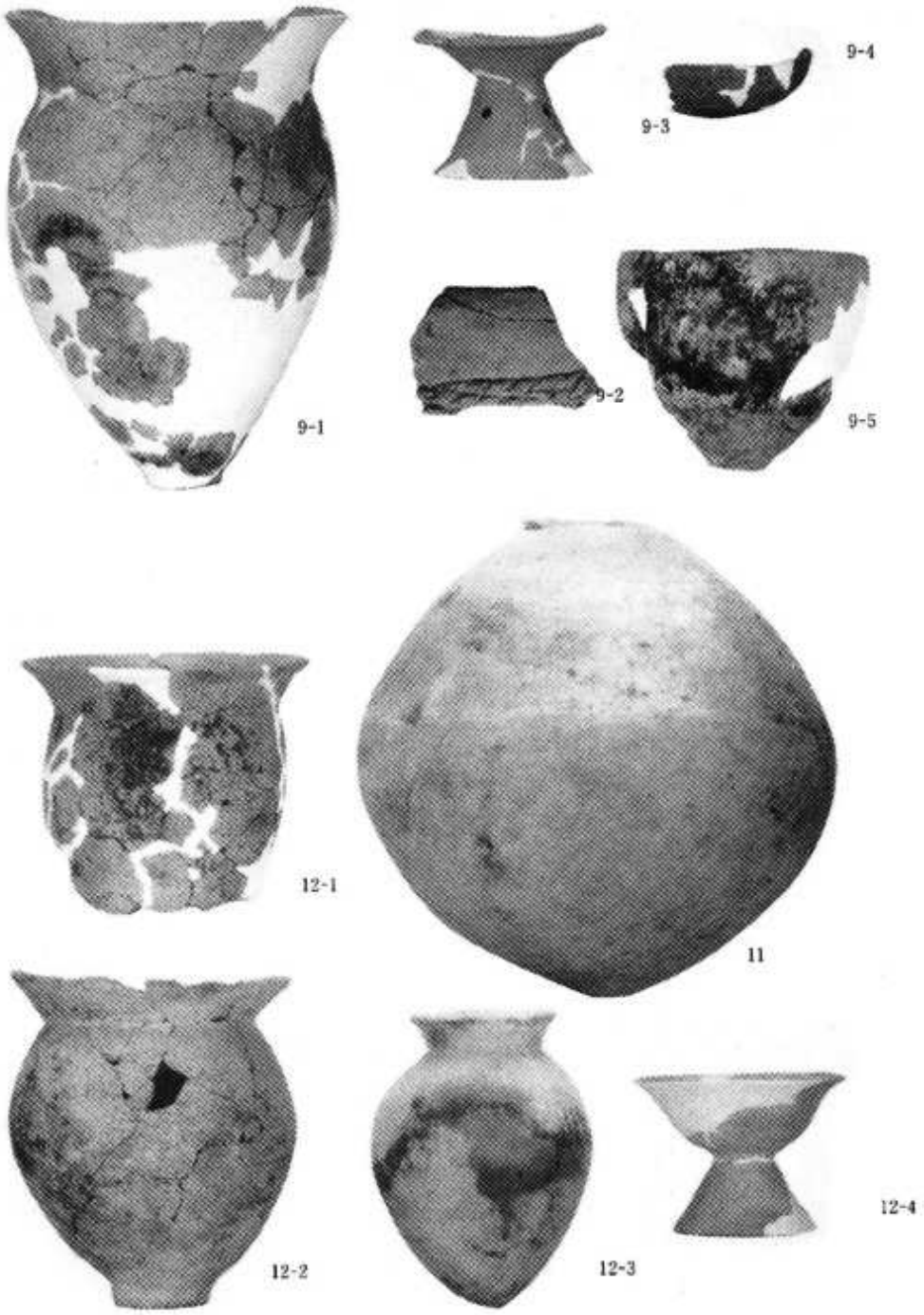
集石遺構検出状況

図版9



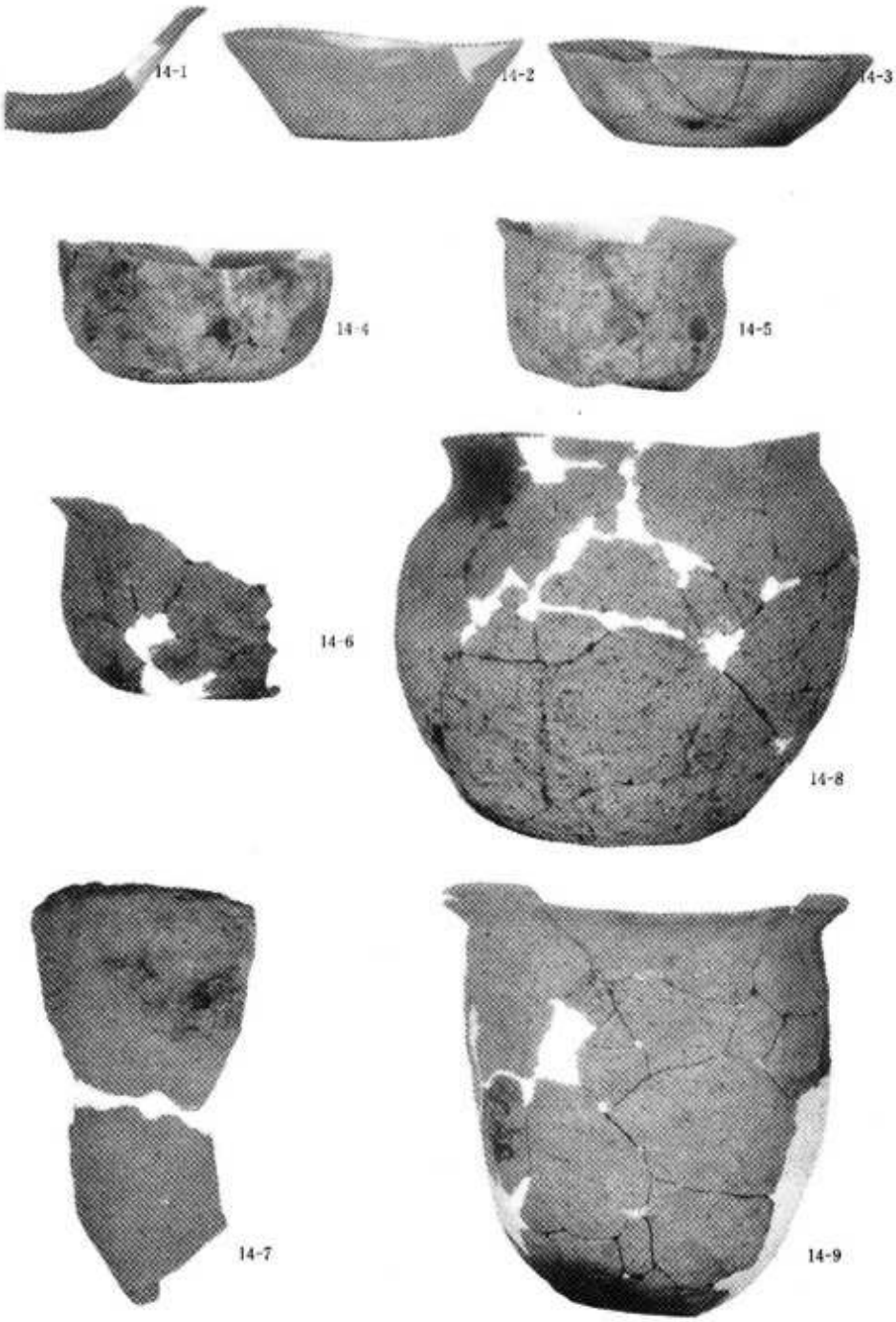
SA4・SA18出土遺物（SA4…4-1～4-2 SA18…6-1～6-5,7-1～7-2）

図版10



SA19・SA9出土遺物（SA19…9-1～9-5 SA9…11、12-1～12-4

図版11



SA20出土遺物

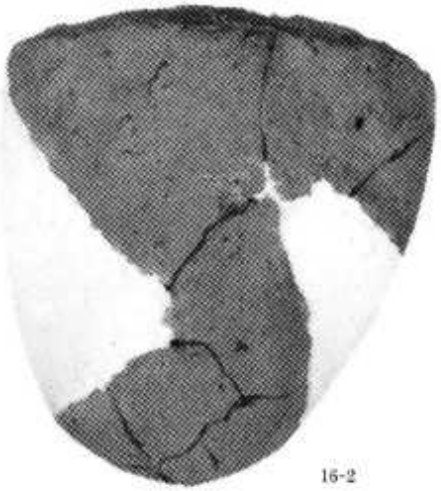
図版12

16-1

20-1

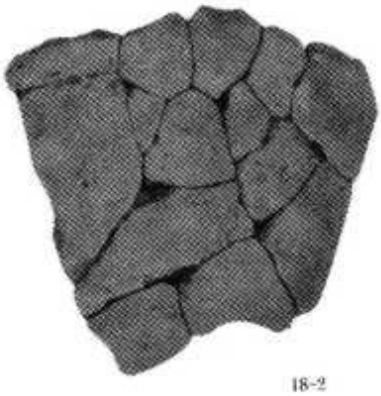
20-2

20-3



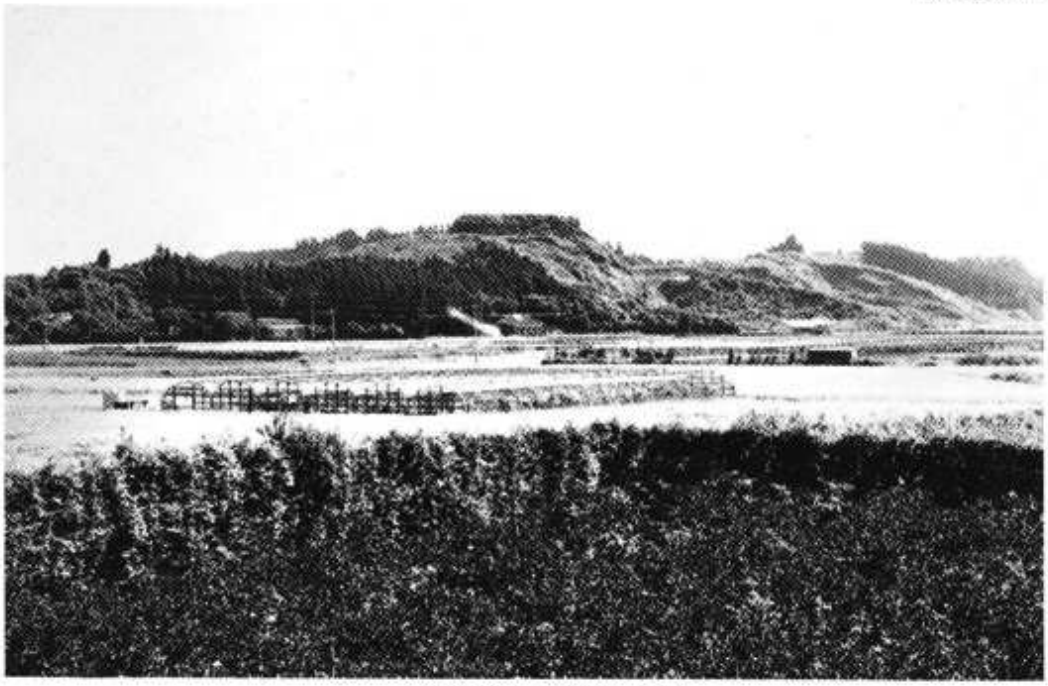
16-2

18-1



18-2

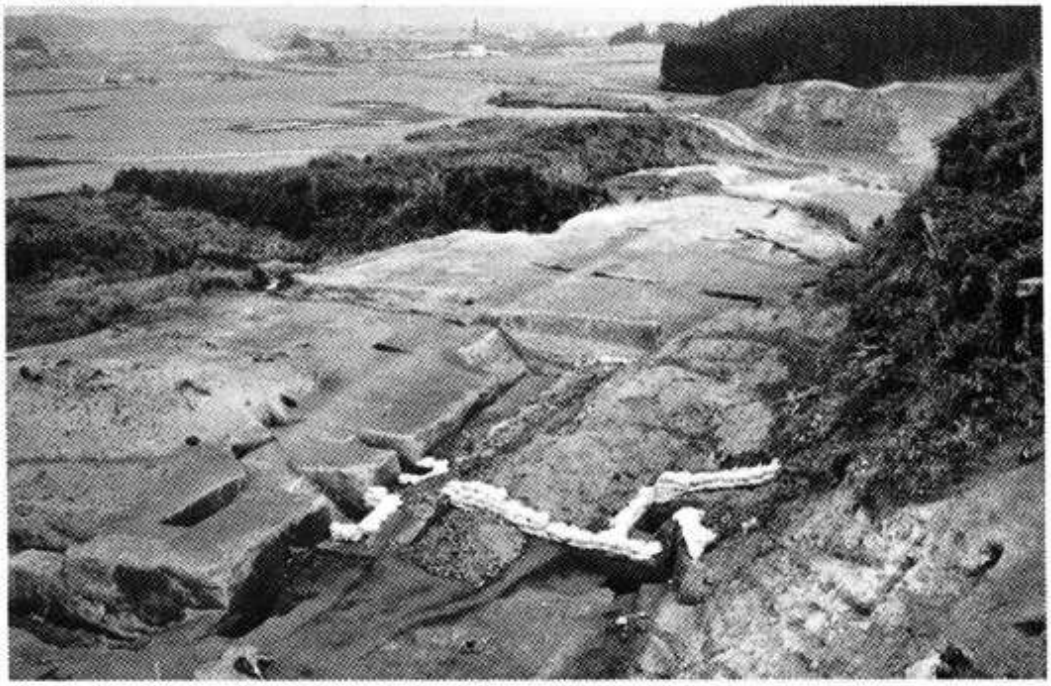
SA3・SA7・SC4出土遺物（SA3…16-1～16-2 SA7…18-1～18-2 SC4…20-1～20-3）



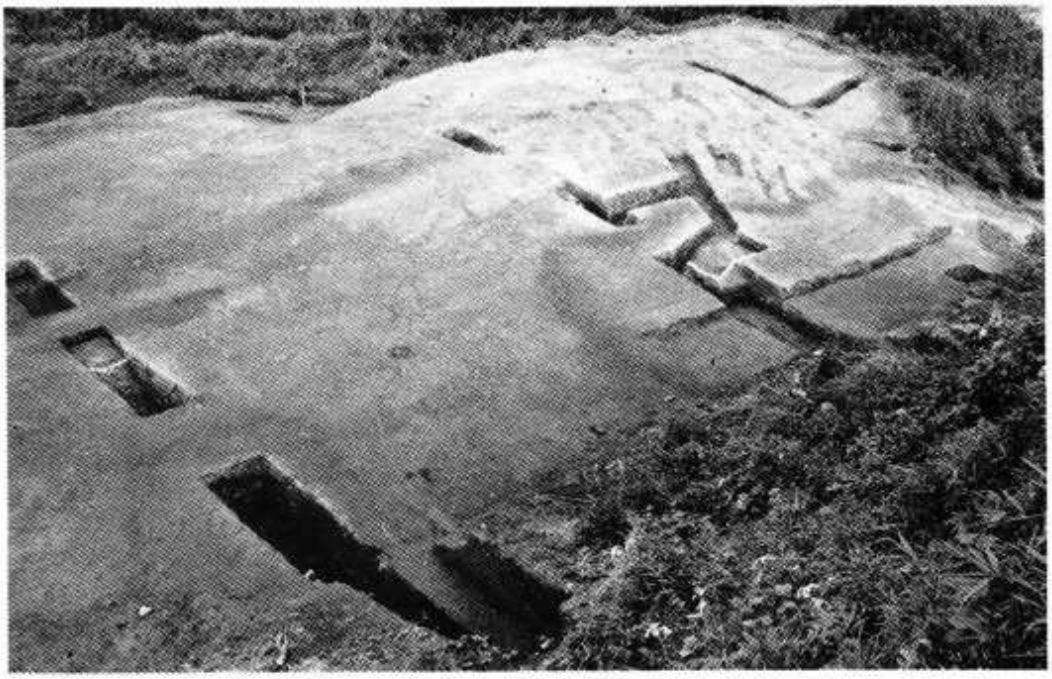
車坂城跡遠景（南から）

車坂城跡遠景（北・陣ノ内遺跡より）

図版14

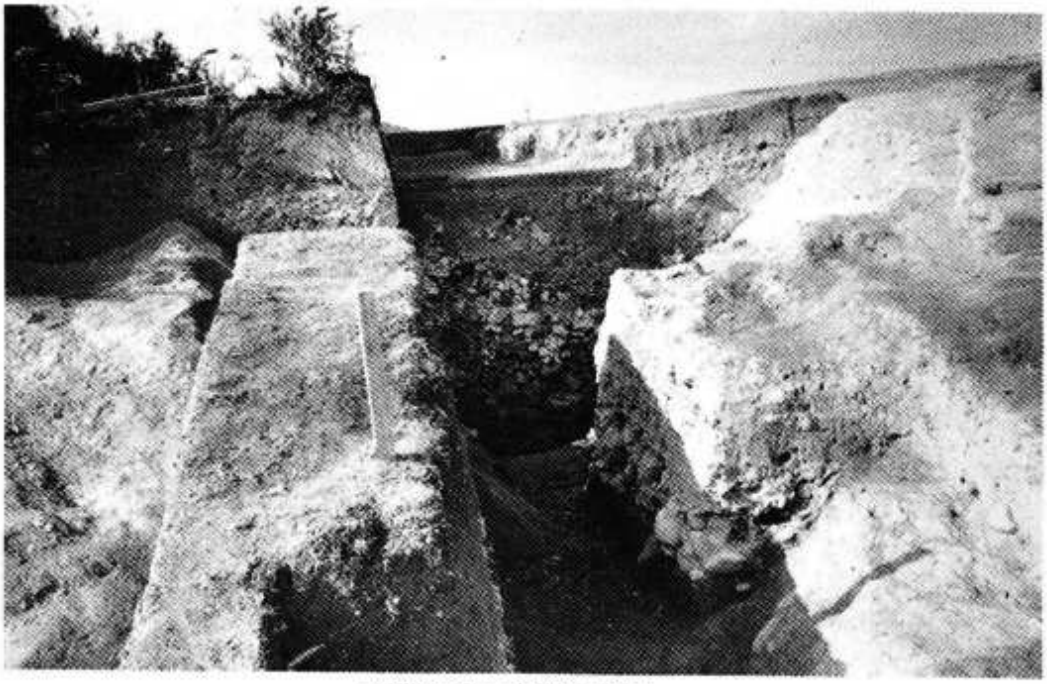


帯曲輪検出状況（北側）



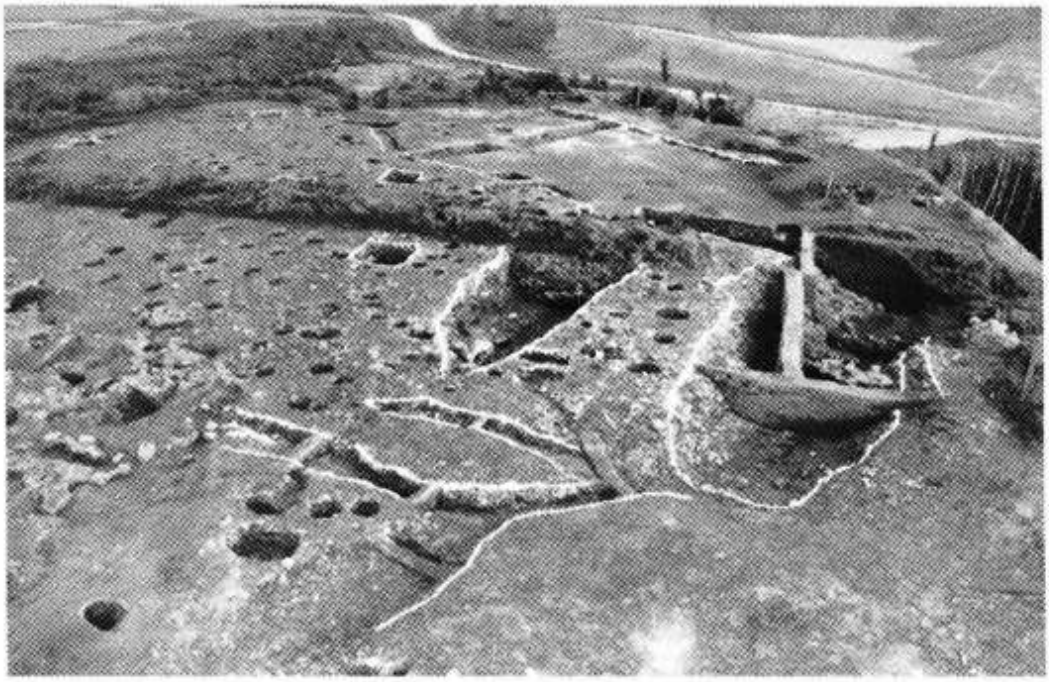
帯曲輪検出状況（北東端）

帯曲輪空堀検出状況

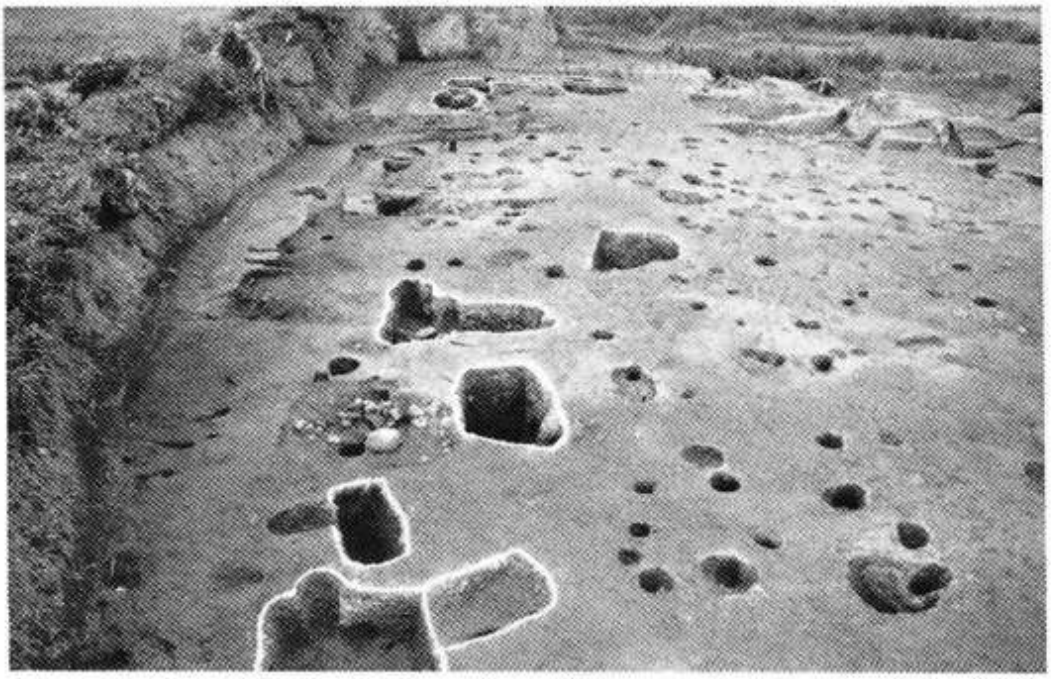


帯曲輪空堀東側検出状況

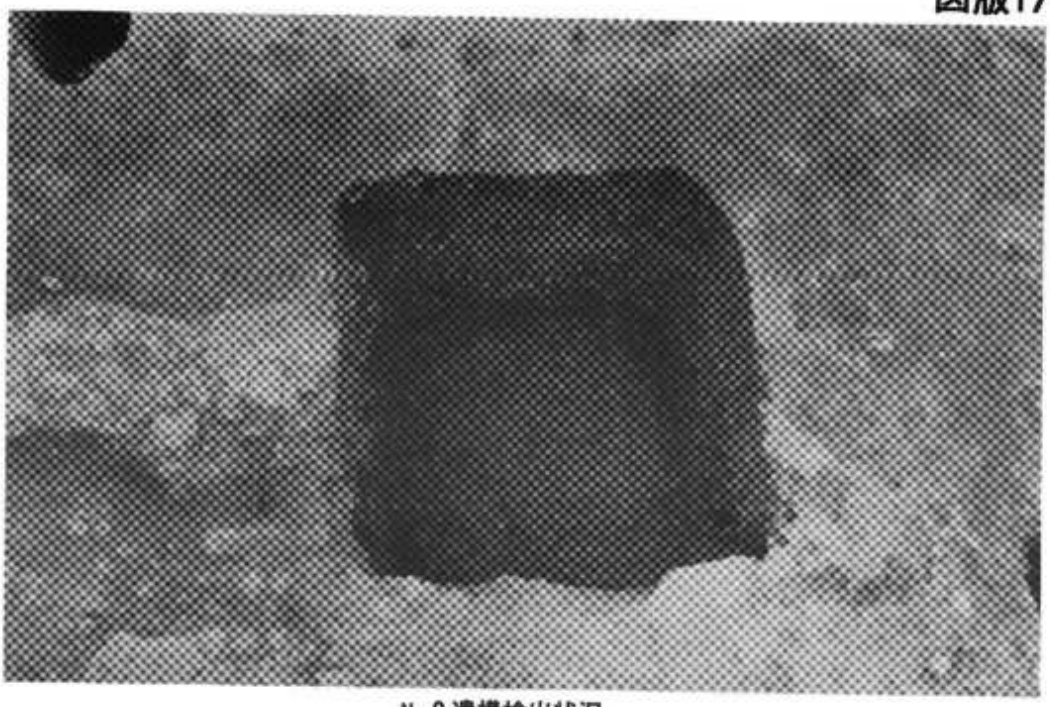
図版16



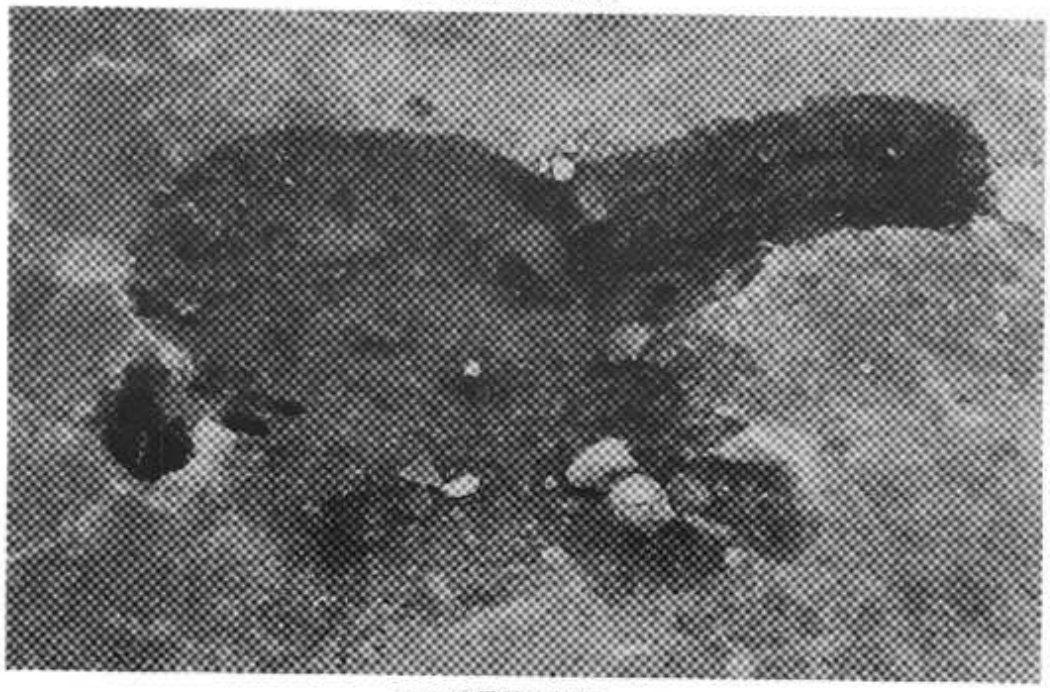
曲輪検出状況（東側）



曲輪検出状況（西側）

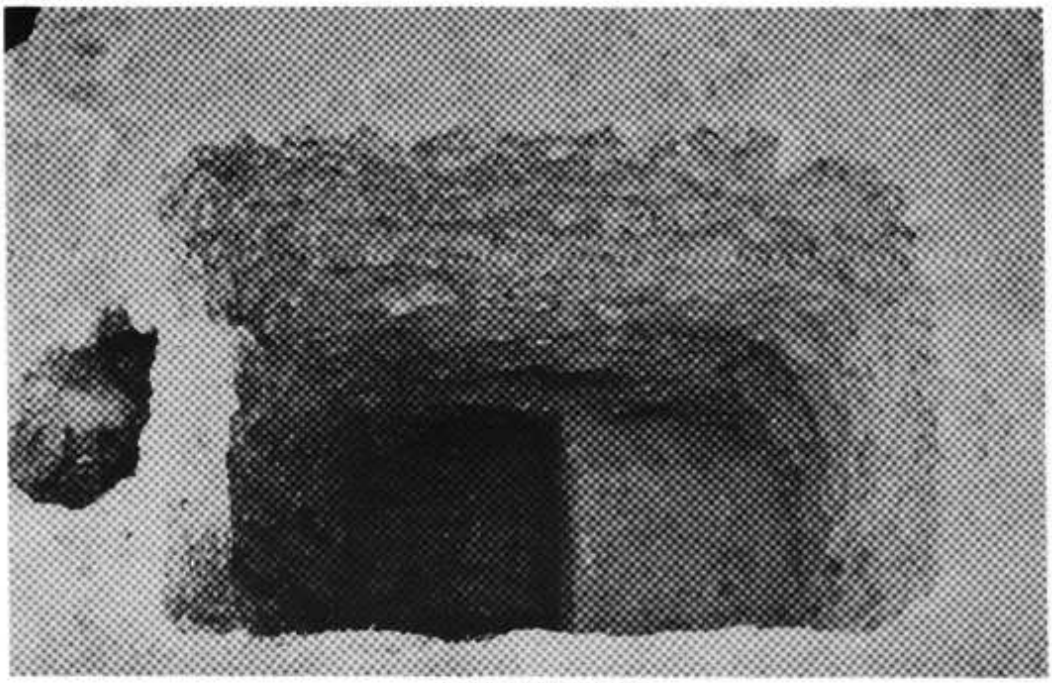


No 9 遺構検出状況

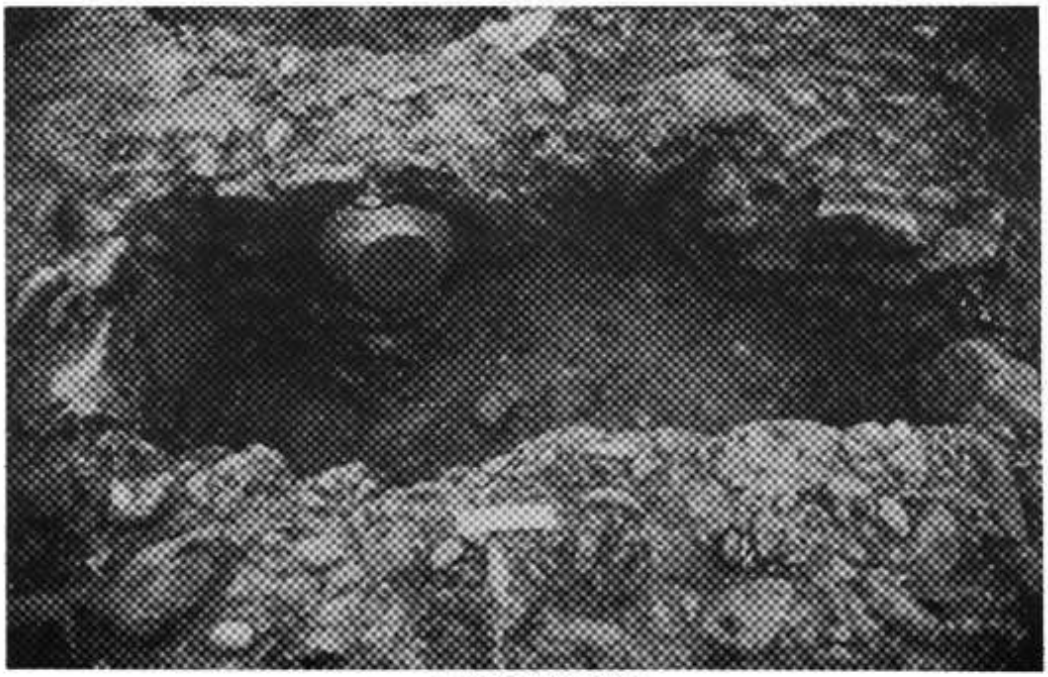


No35遺構検出状況

図版18

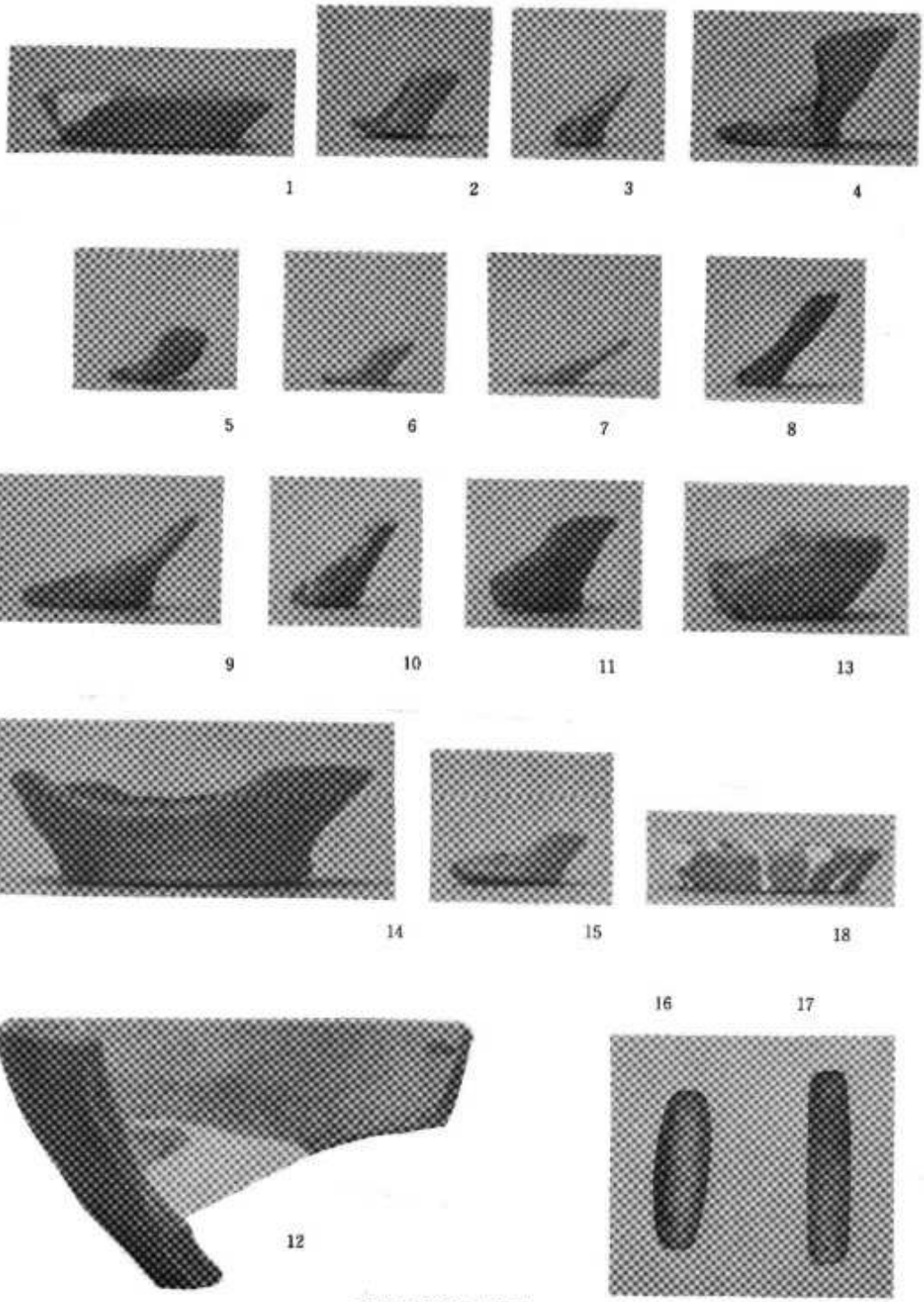


No11遺構検出状況



No23遺構検出状況

図版19



車坂城跡出土遺物

宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅵ）

発行年月日　昭和62年３月31日

編　　集　宮崎県教育庁文化課

発　　行　宮崎県教育委員会